〈小特集〉

公共性の危機と公共社会学の課題

――市民と諸科学との対話へ――

清　家　竜　介

要旨：「社会統合の危機」「教養と人間性の危機」「地球規模での生態学的危機」と三つの危機は，相互に結びついた「複合的危機（polycrisis）」というべきものである。このような現代の複合的危機に対する，社会科学の領域における重要な学問的応答として，市民と諸科学との対話を志向する「公共社会学（public sociology）」が提唱されている。本稿は，公共性の危機と複合的危機のあり方を考察すると同時に，その危機に積極的にかかわろうとする公共社会学の意義について論じる。また本稿は，ハンナ・アーレントが提示した「人間の条件」の現代的意義を問い直すことを縦軸にして，現代の公共性の危機について考察するものでもある。

目　次

はじめに
1．公共性と「社会統合の危機」
2．複合危機と「ソーシャルなもの」「環境」への配慮
3．アーレントの「人間の条件」と公共性論
4．パイデイアからアルテース・リベラーレスへ
5．メカニカル・アーツの台頭と大学の形成
6．「世界疎外」と公共性の危機
7．近代における公共性と教養教育
8．新自由主義の台頭と「教養と人間性の危機」
9．公共社会学の試み
10．四つの社会学と「人間の条件」
11．社会学的想像力の更新と「地球規模での生態学的危機」
結び．ポストヒューマン的窮状と「条件なき大学」

はじめに

本稿は，現代における公共性の危機とその危機に対応しようとする公共社会学の意義について論じるものである。

現代における公共性の危機は，喫緊の課題である3つの主要な危機と不可分の関係にある。その危機とは，現代の市民社会における「社会統合の危機」であり，もう一つは「地球規模での生態学的危機」である。それらの危機は，同時に近現代の市民的主体性の基盤となった「教養と人間性の危機」と結びついている。

まず「社会統合の危機」は，グローバル化した資本主義経済の発展が「国民国家の社会統合」を危機に陥らせると同時に「国際政治における社会統合」も機能不全であることを表現するものである。規制緩和された国際的金融取引を基盤にグローバル化した現在の資本主義経済を国民国家のレベルの政治で制御することが困難になっている。その影響で富者と貧者の経済的格差が拡大するとともに，多くの国々で右派と左派のポピュリズムが勢いを増している。加えてロシアのウクライナ侵攻に見られるように旧来の国際法や国連などの国際組織では対応することが困難な事例が様々なかたちで生じており，国際政治における社会統合も危機的状況にある。

二つ目が「地球規模での生態学的危機」である。グローバル化した資本主義経済は，拡大再生産を原理とし，産業主義と結びつくことによって自然を開発・搾取するとともに，急激に世界人口を増大させてきた。資本主義経済の拡大再生産の過程は，無尽蔵に産業廃棄物を生み出すと同時に様々な外部不経済を生み出してきた。環境汚染，温暖化ガスの排出による地球温暖化と気候変動，コロナウイルスの蔓延もこの拡大再生産を原理とする資本主義経済の発展と不可分なものである。

三つ目の「教養と人間性の危機」であるが，まず「社会統合の危機」とともに各国の市民たちの政治的関心と参加意識が低下傾向にあることが挙げられる。グローバリズムを牽引した新自由主義経済とその進展とともに発生した統治にかかわる新自由主義的理性が市民社会へと浸透し，市民的理性を侵食している。この新自由主義的理性の働きによって，人々は新自由主義に適合的な経済主体である「ホモ・エコノミクス」へと主体化していく傾向にある。そして「民営化＝私有化（privatization）」を基調とする新自由主義的統治は，再配分を求める市民たちの要求を跳ね除け，その結果，政治的無力感と無関心を蔓延させている。

他方で多くの人々の政治的関心が，合意を目的とする対話的理性に基づくのでなく，閉鎖的なナショナリズムと結びついた右派ポピュリズムへと向かいつつある。

市民の「ホモ・エコノミクス」への還元，政治的関心の希薄化，ポピュリズムの興隆といった社会現象の広がりは，西洋近代が育んできた「教養と人間性の危機」と呼ぶべきものである。また西欧近代と不可分な「人間性」の概念は，「地球規模での生態学的危機」とも不可分なかたちで結びついている。

「社会統合の危機」「地球規模での生態学的危機」「教養と人間性の危機」の三つの危機は，相互に結びついた「複合危機（polycrisis）」というべきものである(1)。このような現代の複合危機に対する，社会科学の領域における重要な学問的応答として，市民と諸科学との対話を志向する「公共社会学（public sosiology）」が提唱されている。

本稿は，公共性の危機と複合危機のあり方を考察すると同時に，その危機に積極的にかかわろうとする公共社会学の意義について論じる。また本稿は，ハンナ・アーレントが提示した「人間の条件」の現代的意義を問い直すことを縦軸にして，現代の公共性の危機について考察するものでもある。

1．公共性と「社会統合の危機」

ドイツ語の Öffentlichkeit，それに対応する英語の public sphere は，本邦では「公共性」や「公共圏」と翻訳されている。筆者は，その翻訳語の双方にそれぞれ妥当性があると考える。というのも花田達朗が指摘するように，それらの語には理念と現実，規範と実態の二重性が込められているからである（花田 1996: 3）。本稿では，Öffentlichkeit と public sphere の訳語として「公共性」を基調として用いるが，特に理念的・抽象的性質を意味する場合に「公共性」，その公共性を担う空間的・物質的形態について「公共圏」の訳語を当てることとする。

最も早い時期に，公共性の概念を近代市民社会の進展にとって不可欠な要件として学術的に取り上げたのは，イマヌエル・カントである。カントは，1784 年に発表した「啓蒙とは何か」の中で，宗教的規範や国家による検閲などによって制約されていた理性の使用を，それらの制約から解放された「公的な（öffentlich）」かたちで使用する必要性を主張した（Kant 1784＝2019）。すなわち制約のない公開された自由な討議空間こそが，学者あるいは世界市民の立場からの理性の使用を促し，普遍的な真理の追求を可能にするという論陣を張ったのである。この討議する公衆に開かれた自由な討議空間こそが，批判的啓蒙を推進するための最も重要な社会的条件であることが，カントによって高らかに宣言されたのだ。

カントは同論文の中で，学術的な真理の追求だけでなく，宗教的規範の問い直し，法律の妥当性についても「公的な（öffentlich）」なかたちで討議されるべきであることを主張している。このようにカントにおける「公共性（Öffentlichkeit）」の概念は，学術的な真理だけでなく，宗教的規範や法の妥当性をも公論によって討議することを射程に入れたものであった。いわば「何が真理であるか」を問う理論理性だけでなく，「いかに生きるべきか」を問う実践理性の領域をも公共性に関わるものとしたのである。このカントの公共性の概念が，近・現代の西洋的な公共性の概念の原型となる。

この公共性の概念を現代において引き継いだ代表者が，ハンナ・アーレントとユルゲン・ハーバマスの二人である。アーレントの公共性論は，古代ギリシア・ローマの公共性についての考察が基

礎にあるため，現代の「公共性の危機」を論じる本節では，まずハーバマスの公共性論について触れておきたい。

ハーバマスの公共性論は，1962 年の『公共性の構造転換』以来，様々な機会に応じてその論点を深め，2022 年に出版された『公共性の新たな構造転換と熟議民主主義』にまで至っている。

ハーバマスは，『公共性の構造転換』で，公共性がメディア環境という物質的条件によって構造転換したことを論じている（Habermas 1962）。ハーバマスは，西欧において中世の公共性を「具現的公共圏」と呼ぶ。具現的公共圏は，世俗的権力である王や宗教的権威である教会が，きらびやかな衣装や装身具，あるいは巨大かつ壮麗な建築物を用いることで，その権力や権威を人々に公開して誇示するものである。その誇示の効果によって，人々の間の支配と被支配の関係を維持するものであった。

その後，グーテンベルクの活版印刷術がもたらした活字文化の拡大によって，活字の書物を介して結びつく「文芸的公共圏」が成立する。読書人たちによって担われ，文芸についての批評をもっぱらとした文芸的公共圏を土台に，書物や新聞などを介して討議する公衆が現れる。この討議する公衆が，封建的諸制度を批判的に論じる「政治的公共圏」の担い手となり，市民革命を実現させ，自由な討議に基づく民主主義的な市民社会を成立させた。その結果，中世的な具現的公共圏は衰退していくことになる。このように公共性の構造は，その時代の物質的なメディア環境に大きく影響を受ける。

次に現代の公共性の問題に移ろう。ハーバマスは，冷戦以降の新自由主義に牽引された資本主義経済の浸透によって，社会国家や福祉国家が機能不全となり，民主主義が危機に陥ることをしばしば論じている（Habermas 2019）。この民主主義の危機論は，アメリカ・フランクフルト学派に連なるナンシー・フレイザーとウェンディ・ブラウンやヴォルフガング・シュトレークなどの論者にも共有されている（Fraser 2022, Brown 2015, Streeek 2013）。それらの論者での論旨の違いはあるが，新自由主義の浸透によってグローバル化した資本主義経済と福祉国家や社会国家の再分配を可能にする国内政治とのリンクが切断されるという点で一致している。この切断は，公共圏論から見ると，国家レベルの政治的公共圏によって政治・経済システムを制御する社会統合のメカニズムが棄損されたことを意味する。

また「社会統合の危機」から生じる「再分配の機能不全」という裂け目から，ポピュリズム的傾向が胚胎する。右派・左派にかかわらずポピュリズム政党は，われわれ「人民（people）」とみなされる国民や民族以外の，外国人や民族的・宗教的マイノリティを「よそ者」とみなし敵視したり，党派的利益を追求する「既成政党」と「エリート層」の腐敗を糾弾する傾向にある（Müller 2015, Mouffe 2018）。

ハーバマスが現代のメディア環境における公共性の問題を論じた『公共性の新たな構造転換と熟議民主主義』で，新たなメディア環境であるインターネットとオンライン上のソーシャルメディアというプラットフォームで意見の極端化や分断などの新たな制約が生じ，その結果，熟議民主主義が危機的状況にあることを指摘している（Habermas 2022）

2. 複合危機と「ソーシャルなもの」「環境」への配慮

国連サミットでの SDGs の採択で表明された「持続可能性の危機」は，環境問題の深刻化を背景としている。

SDGs に先行した MDGs は，開発経済学を基礎とし，ユネスコ，ユニセフ，国連開発計画（UNPD），世界銀行などの様々な会議を経た上で，2000 年に国連ミレニアム・サミットで採択され 2015 年までに目標達成することを目指した（高柳 2018: 1-6）。MDGs は，発展途上国が貧困から抜け出すことを主眼に貧困・教育・ジェンダーなどの社会開発を目標とし，多くの目標で成果を上げた。

後継の SDGs は，国連開発計画（UNPD）と国連経済社会局（DESA）が中心となり，世界銀行も参加したタスクフォースによって「ポスト MDGs」として構想された。さらに地球サミット

20 周年を機に開催された「リオ＋20」（国連持続可能な開発会議）で，コロンビアとグアテマラ政府が SDGs の策定を提起し，それが合意されたことも SDGs の成立の背景となる（高柳 2018: 1-6）。

2015 年に策定され 2030 年までを目標達成期間とする SDGs は，気候変動にかかわる「目標 13」や海洋と海洋資源にかかわる「目標 14」，陸上生態系に関わる「目標 15」に見られるように地球環境問題に対する危機意識が大きく増したものとなっている。それらの目標は，国連が中心となって推進する国際的プロジェクトが，外部不経済としての地球環境問題の深刻化という経済開発の限界に直面したことを表現するものである。その結果，発展途上国の開発目標だけでなく，先進諸国の政治経済活動をも含めた「持続可能な開発目標」というより深刻な理念を抱え込まざるを得なくなったと評価できるだろう。また現在も続くコロナのパンデミックも資本主義経済がもたらすグローバルな生態学的危機と結びついている。

このような時代意識を反映するかのように，人間の経済活動が地質学の時代を画することを意味する「人新世（Anthropocene）」という術語も一般的に用いられるようになった（Fressoz and Bonneuil 2016）。コロナのパンデミックでも明らかになったが生態学的危機は，富裕なものたち以上に，低所得者たちにより深刻な影響を及ぼす傾向にある。

また核兵器を所有する，国際連合の常任理事国であるロシアが，ウクライナ侵攻に際し核兵器の使用をほのめかし従来の国際的秩序も揺らいでいる。現代の公共圏では，自己責任の観念と政治的無関心が浸透する一方で，グローバル，ナショナル，ローカルなレベルで様々な社会問題を抱え込んでいる。さらに気候変動や陸上や海上の生態系の撹乱などの地球環境問題も加わり，まさに多事争論というべき状況である。

この「社会統合の危機」「地球規模での生態学的危機」という二つの危機の根源に拡大再生産を続ける資本主義経済が存在している。気候変動や生態系の撹乱については，資本主義経済の成立以降に生じた問題であり，「人新世」ではなく「資本新世（Capitalocene）」というべきだと主張する論者もいる(2)。

資本新世という批判的応答に表現されるように現代の公共性の危機は，幾つもの危機が結びついた複合危機と不可分なものである。このような複合危機に際して公共圏でどのように討議が行われ，新たな合意が得られるかによって従来の文明の在り方をも変容させかねない文明史的分岐点となりうる。ドイツ語の Kritik や仏語の critique の語源にあたる「危機」を意味するギリシア語「クリノー」は，「物事の境界を分けること，分岐点，裁き」を意味する。複合危機にさいなまれる現代社会は，真理と善き生を求めるカント的批判による反省と裁きを必要としているが，その道のりは困難を極める。

ところで「公共性の危機」という課題は，日本における教育やビジネスの領域にも及ぶものである。例えば龍谷大学は，仏教 SDGs を掲げ，持続可能性の危機に対応すべき教学の体制を整えていこうとしている。日本学術会議の 2010 年の提言「21 世紀の教養教育」では，21 世紀が「メディアの地殻変動」と「知の地殻変動」による予測困難な時代として把握され，それに対応すべき，新たな教養教育の必要性を説いている。

また近年の文部科学省の，平成 30 年の中学校・高等学校の学習指導要領でも，現代を「予測困難な時代」とし，その変化にとんだ時代に向き合うには「他者と協力して課題を解決する」必要があることを強調している（文部科学省 2018a, 2018b）。その中でも新たな科目である「公共」では，「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質能力を育成する」ことを理念として掲げている（文部科学省 2018b）。

ビジネスの領域でも，変化に富んだ現代社会を表現する「VUCA（ブーカ）」という言葉が流通している（柴田・岡部・加藤 2019）。VUCA とは，Volatility・Uncertainty・Complexity・Ambiguity の頭文字を取った造語で，もともと「先行きが不透明で，将来の予測が困難な状態」を意味する軍事用語であった。軍事用語として使われていた言葉がビジネスの領域に浸透したのは，これま

での常識が通用しない大きな変化が生じていることの証であろう。このように変化に富んだ社会に対応しようとするビジネスの領域で重視され始めているのが，「ソーシャルなもの」と「環境」への配慮である。

2019年のビジネス・ラウンド・テーブル（BRT）では，「株主資本主義からステークホルダー資本主義への転換」が提起された。ステークホルダーは，株主・経営者・従業員・顧客・取引先のほか，金融機関，行政機関，各種団体など，企業のあらゆる利害関係者を指す言葉である。利益でも損失でも，何らかの影響を企業に及ぼす存在であればステークホルダーであり，必ずしもその利害は一致しない。これまで新自由主義を牽引した株主資本主義ではない，新しい資本主義としてのステーホルダー資本主義の提言は，株主だけでなく，従業員，労働者，地域住民，利害関係者を重視する，いわば「経済の民主化」に通じるものである。またESG投資，ESG経営，エシカル消費といった新たな倫理的な経済行為も浸透しつつある(3)。

新自由主義的理性によって脇に追いやられていた「ソーシャルなもの」や「環境」に対して配慮する感受性と共通感覚が教育や経済の領域で浸透しつつある。この「ソーシャルなもの」の復権と「環境」に対する配慮は，21世紀の市民社会の新たな方向性を示すものであろう。その方向性と連動するかのように，リベラル・アーツに対する関心がビジネス界においても高まっている。このリベラル・アーツこそが「ソーシャルなもの」だけでなく「公的なもの」の復権に関わる重要な要素である。いわば教育の領域においても，ビジネスの領域においても「ソーシャルなもの」と「公的なもの」の浸透とその復権が進み，それらにかかわる共通感覚が形成されつつある(4)。

3. アーレントの「人間の条件」と公共性論

教育やビジネスの領域におけるリベラル・アーツに対する関心の高まりは，変化に富んだ時代の困難を抱え込んでしまった人間類型であるホモ・エコノミクスの限界と結びついている。人間性とその基盤となる「教養（Bildung）」に対する関心の高まりは同時に「教養と人間性の危機」の表現でもある。ここで公共性の危機と不可分な「教養と人間性の危機」について考えるために，ハンナ・アーレンとの『人間の条件』を紐解いていきたい（Arendt 1958＝1994, 1960＝2015）。

アーレントは『人間の条件』において，古代ギリシア・ローマ世界で，人間性を可能にした「活動力（activity）」を分類して論じている。その際，アレントは活動力を「労働（labor）」「制作（work）」「活動（action）」の3つに区分して論じている。この3つに類型化された活動力が，人間性の基礎をかたち作る。また同書では，これらの3つの活動力と対比される，静的な「観照（contemplate）」という非活動的な生活様式の存在の重要性も指摘している。

古代ギリシアにおける「労働（labor）」は，人間の身体的生命が自己保存するために必要なものを作り出す。「労働」は，人間の生命的次元であるゾーエーに関わる再生産活動であり，奴隷や女性によって担われた。この「労働」の担い手を総じて「労働する動物（animal laborans）」とアーレントは呼ぶ。次の「制作（work）」は，自然過程に属さない人工物の世界を作る活動であり，主に職人や奴隷によって担われた。アーレントは，その担い手を総じて「工作人（homo faber）」と呼んでいる。工作人による自然への働きかけによって生産される人工物の総体を「世界（world）」とし，世代を超えて人間はそこに住うという。

そして「活動（action）」は，ポリスの公的領域における政治的実践に係るものである。工作人によって作られた世界を基盤に，古代ギリシアの市民たちは，ポリスに関わる政治的な「活動」と「言論（speech）」を交わし，それらを共有する「共通世界（common world）」を創設する。この共通世界における「活動」と「言論」を通じて，ポリスの自由市民たちは新しい人間関係の網の目と自己の物語を作り出し，より良き生と名誉を追求する。この「活動」の担い手をアーレントは，「ポリス的動物（animal socialis）」と呼ぶ。

アーレントによれば，古代ギリシアのポリスにおける「公的（public）」とは，二つの現象を意味した（Arendt［1958］1998: 50-58＝1994: 75-87）。

まず第一に「公的（public）」なものは，可能な限り広い公開性を持ち，われわれや他者によっても見られ聞かれることでリアリティを形成することを意味する。第二に「私的（private）」な領域である「家政（oikos）」という私有された場所とは区別され，人々に共有される，人間の制作物と結びついた「世界そのもの」としての「共通世界（common world）」である。

この人々に共有される事物としての「共通世界」は，人々のあいだ挟まれたテーブルのように，他者とのあいだで活動と言論を交わすことを可能にする「間（in-between）」を生じさせる。人々を分割するとともに結びつける共有された「共通世界」を介して活動と言論を交わすことで，人々の間で，およそ理性的な人間であれば同じように感ずると想定される「共通感覚（common sense）」が成立する。

アリストテレスの『政治学』でも論じられているが，古代ギリシアの自由市民であることの条件は，民会に参加する権利と裁判を行う権利を認められていることであった（アリストテレス 2009: 24）。市民たちは，共通世界へと参入する「世界の自由」によって，活動と言論を通じて他者の前に「現われ（appearance）」，パースペクティブと視点を異にする複数の他者たちと出会う。アーレントは，この他者と共存するあり方を「複数性（plurality）」と呼び，それを自由の条件と考えた。共通世界としてのポリスという政治領域では，暴力によらず，言論と説得によって決定することが求められた（Arendt［1958］1998: 26-27＝1994: 47）。

最後の「観照（contemplate）」は，物事の本質について，落ち着いて熟慮することである。すなわち普遍的な真理を求めて哲学をすることであった。活動的生活と対比される「観照」的生活は，ソクラテス以降，完全な静けさにおいて真理を観照することを理想化するものであり，多くの市民たちによって活動以上に重視される生活様式となった。アーレントは，この観照の担い手を「理性的動物（animal rationale）」と呼ぶ。

古代ギリシア・ローマ世界の自由市民は，政治的な「活動」と学問の領域である「観照」を重んじ，労苦を必要とする「制作」と「労働」の領域については奴隷や外国人，そして女性たちを主体として担わせることになった。

アーレントによれば，生命維持のために不可欠な「労働」や大きな労力を要求する「制作」を非人間的・家畜的なものと見做したがゆえに古代ギリシア人は，奴隷制を必要とした（Arendt［1958］1998: 84＝1994: 137）。それら家政にかかわる私的領域から区分される，生命の必要性と制作の労苦から解放された公的領域を確保することで人間性が獲得されるとアーレントは考えたのである。

このようにアーレントの古代ギリシア・ローマの公共性論において，公共性と人間性は，不可分なものである。また公共性は，政治にかかわる公的領域で「複数性」を可能とすると同時に活動力から解放された「思考（thinking）」によって真理を把握しようとする哲学者たちの「観照」を可能にする社会的条件としても機能していた。この公的領域で追求される「活動」と「観照」こそが人間性を育んだ。けれども，その人間性を可能にしたのは，公的領域から排除され私的領域に閉じ込められた工作人による「制作」と，労働する動物として扱われた女性・奴隷・外国人の「労働」の支えだったのである。

4. パイデイアから アルテース・リベラーレスへ

古代ギリシアの教育である「パイデイア」は，まず詩人たちによって担われた。エリック・ハヴロックによれば，詩人たちの語りは，神々や英雄たち事績を詩句の中に保存し，それを同胞たちに伝達するものであった。「パイデイア」と呼ばれた詩人たちは，衆に優れた韻律と記憶の才能と，人々に伝達する能力が要求された（Havelock 1963＝1997）。そして「ムシケー（音楽・文芸）」がその記憶と伝達を助け，強化する。詩人たちによる詩の朗誦は，音楽と身体的ダンスをともない，人々の記憶の保持を補助したと考えられる。

古代ギリシアの民族詩人の範型であったホメロスの叙事詩は，それ以前の詩人たちによって口承で語り継がれた物語が文字に書き起こされたもの

である。ホメロスは，古代ギリシアで無文字社会の口踊文化と文字文化が接触する最初期の代表的詩人なのである。民族の物語を書き留めたホメロスの叙事詩は，政治的活動を担う市民たちの教養の基礎となった。

古代ギリシアの文字化と市民化がすすみソフィストや哲学者たちが現れ，詩人によって担われてきた「パイデイア」は，「エンキュクリオス・パイデイア」へと発展する（大口 2014: 115-119，芳沢 2018: 4-5）。「エンキュクリオス」とは「円環状」を意味する形容詞である。エンキュクリオス・パイデイアは，「一般教育，誰もが認める教育」「完結した教育」を意味する。その内実は，いわゆる自由七科である。

アーレントの「人間の条件」に対応させると，エンキュクリオス・パイデイアは，「活動」を支えるロゴスの弁証法的側面である文法・弁証法・修辞学の三科，「観照」を支える数学的側面の四科，幾何・算術・天文学・音楽へと収斂していったことになる。いわば，古代ギリシアの市民たちが重視した「活動」と「観照」を支える教養を育む教育としてエンキュクリオス・パイデイアが成立したといえるだろう。

このエンキュクリオス・パイデイアの伝統を古代ローマ社会が引き継ぐ。ヴァロが「パイデイア」を「フマニタス（humanitas）」に翻訳し，さらにキケロが「アルテース・リベラーレス（artes liberales）」を人文的学習とした（大口 2014: 168）。

「リベラル（liberal）」の語源にあたる liber は，奴隷ではない「自由市民であり，崇高で高潔であること」を意味する（ライト 2009: 63）。これに接尾語である alis がつくと liberalis となり「成長すること」を意味する古英語の leodan と同類の意味となるという。ギリシア語の「テクネー」が「アルス（ars）」に，エンキュクリオス・パイデイアが「アルテース・リベラーレス（自由人の諸技術・諸学芸）」に翻訳されたのである。

古代ローマで成立した「自由七科（セプテム・アルテース・リベラーレス）」は，文化の理想のプログラムとしての教育であった。古代ギリシアの自由七科は，「クワドリウィウム（四科）」の算術・天文学・幾何学・音楽からなる。「トリウィウム（三科）」は文法学・修辞学・弁証論からなる。文法は文学的伝統の中に組み入れられ，歴史と道徳教育を包含するものであった。論理は修辞の下に位置付けられ，修辞学がプログラムを支配した。

大口邦雄は，アルテース・リベラーレスの意義を七つにまとめている（大口 2014: 168-171）。そのうち公共性にかかわる三点について触れておきたい。まず第一に社会を主導する「良き市民」となるよう訓練し，徹底した徳を持ち，どこでも有能さを発揮できる市民を生み出すこと。第二に古典的テキストの一群が，教育のための手段として認定され，かつ同意されている。そのテキストはギリシアの文学が多く，後にラテンの著作も認められた。そして第三に学ぶほどの余暇を持つ自由市民のためのエリート教育であった。

すなわち「アルテース・リベラーレス」という教育では，学術的真理を追求する以上に，政治に関わる権利を持った古代ローマの自由市民たちが，自らの政治的な「アレテー（徳・能力）」を高めるための教育であったのだ。

トム・ライトによれば，西洋の伝統において「さまざまな問題の解決策を見つけるにあたって，より自由に考えるための潜在的な力を身につけることによって解放される」ことがリベラル・エデュケーションの基本的定義である（ライト 2009: 64）。この基本的定義は，古代ギリシア・ローマ以来，力点の変化はあっても大きな変化がなかったとライトは指摘している。

5. メカニカル・アーツの台頭と大学の形成

近代社会は，ルネッサンスと宗教改革を経ることで形成されてきたが，単に新しい社会が創造されたのではない。近代社会の形成は，古代ギリシア・ローマの人間中心主義的な「人間性（humanitas）」の復権とともにあった。それに加え，自由市民を育むためのリベラルアーツではなく，いわば工作人が用いる「メカニカル・アーツ（artes mechanicae）」が台頭していく社会でもある。

商業の復活と都市化の進展がメカニカル・アー

ツへの需要の高まりの背景となる。中世における大学の発生も，このメカニカル・アーツの台頭という社会的文脈で捉える必要がある。

カロリング朝の神学者ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナは，メカニカル・アーツは「ある種の模倣や，建築などの人間の相違工夫によって作られる」とした（藤本 2021）。ギリシア語の形容詞である「メーカニコス」から，ラテン語の mechanicus や名詞 machina が派生し，英語の mechanical などへと至る。エリウゲナにとって，ラテン語の mechanicus は，人間による「工夫」「考案」「策略」を意味し，工作人による「制作」に関わるものであった。

エリウゲナは，メカニカル・アーツとして織物技術，農業，建築術，武術，商業，料理，冶金術などの領域を上げている。隠岐さや香は，その技に公務に就くことのない，身分の高い人がつかなくても良い生活や商工業の手作業が含まれていることを指摘している（隠岐 2018: 20）。アーレントの「人間の条件」の区分でいえば，メカニカル・アーツは「制作」と「労働」の領域にあたる技芸である。

12 世紀のサン・ヴィクトルのフーゴーは，「哲学」を四部門に分類し，その一つにメカニカル・アーツを数え入れ，その地位を向上させた（藤本 2021）。フーゴーによれば，生物は自らを守る何らかの防御手段を生まれながらに持っているが，人間だけが裸で武装なしに生まれた。そうした「欠乏」ゆえにメカニカル・アーツは生まれた。自らを配慮することを知らない生き物には生来の防御手段が与えられたが，人間は，理性を用いた「制作」によって後天的に防御手段を獲得できる。フーゴーは商学もメカニカルアーツに数え入れている。学習の順序としては，まずリベラル・アーツを学んだ後にメカニカルアーツを学ぶとされた。

アーレントの言う「観照」と「活動」を支えるリベラル・アーツが，いわば対話的理性の領域であるならば，メカニカル・アーツは，人間の必要と欠乏を補うための有用な手段を制作する道具的理性の領域にあたるといえよう。欠乏と有用性に基づくメカニカル・アーツは様々であり，機械学，兵器学，農学，狩猟学，医学，演劇学なども数え入れられた。

中世末期に商業の復活と都市化が進み，特権的知識人層の存在を許容する生産様式と支配組織が形成され，法律家・神学者・医師など資格が必要な職業への需要が高まった（Hans-Werner 1978＝1988）。それに加え，十字軍の遠征などを介したイスラム勢力との交流によって，古代ギリシア・ローマとアラビアの学問の受容し，その需要が増大する。いわゆる 12 世紀ルネサンスである。

このような歴史的過程から専門化した研究者や学者の役割が形成され，彼らの協同・同業組合が普及することになる。こうした動向を背景にし，工作人にかかわる専門的教育の必要からメカニカル・アーツへの需要が高まり，ボローニャ大学やパリ大学などヨーロッパの各地に大学が出現し，その制度を整え始める。

アーレントによれば「人間の条件」を組み換える転機となった出来事は，ガリレオ・ガリレイによる望遠鏡の使用であった（Arendt［1958］1998: 257-268＝1994: 415-428）。望遠鏡という器具は，観察による実証的な証明を可能にし，それまでの思考に基づいた普遍的な真理を求める「観照」に基づく学問的探究を，実験と仮説に基づいた科学的探究へと変容させる。ガリレオが引き起こした出来事を哲学的懐疑によって意味づけたのがルネ・デカルトである。

デカルトの懐疑は，内省によって，精神と物質の二元論を提唱し，物質の領域を数学的に記述できる対象とした。デカルトの段階では，理神論に基づく機械論的自然観であったが，古代ギリシアの「思考」に基づいた純粋な「観照」ではなく，器具と実験を用いた「制作」に基づく自然科学の基礎づけであったとアレントは指摘する。

ガリレイの望遠鏡に象徴されるように，自然科学による科学的な真理の探究は，能動的な活動の領域と不可分なものとなる。そして工作人は数学的に計算可能となった自然を科学技術を用いて支配・利用する。アーレントは，この段階で人間の条件が変容し「工作人」がヒエラルヒーの頂点に立つという。そしてアーレントは，「観照」によって不変の真理の在処として思考されていた「存

在」が，「秘密の過程」である自然史の領域へと変化するという。

自然科学者が自然の探究を推し進める一方で，デカルト以降の哲学者たちは，内省を深めカントのように認識論に向かうか，ジャンバッティスタ・ヴィーコやゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルのように精神や社会の領域を歴史的過程として捉えるようになる（ヴィーコ 2018, Hegel 2002）。

アーレントのいう「人間の条件」の変化を考える上で大切なのは，自然科学，内省に依拠する認識論，精神や社会の領域においても，不易の永遠の真理を求めた，絶対的静の極みである「観照」が排除されるということである。というのも先に述べたように近代において存在は，永遠とは異なった「プロセス」として把握されるからである。

ここでは大学制度の発展を追わないが，カントの「諸学部の争い」について触れておきたい（Kant 1784＝2002）。なぜならば，現代まで持ち越されている，哲学の公的な性格と大学の制度を不可分なかたちで結びつける重要な議論をカントが同書でしているからだ。

12 世期から 18 世期にかけての大学の学部制度は，上級学部と下級学部という構成となる（隠岐 2018）。カントは，「諸学部の争い」において，政府にとって有用性を約束する神学・法学・医学という上級学部に対して，有用性に反してでも，真理の追求を目的とする哲学を中心とする下級学部による批判的介入の重要性を説いている。

カントはその際，神学部を「各人の永遠の幸せ」，法学部を「社会的成員としての市民的幸せ」，医学部を健康と長寿を目的とする「身体的幸せ」という三つの有用性を政府に約束するものであるという（Kant 1784＝2002）。

カントによれば，哲学は，自由であることしか望まず，しかも有用性ではなく，学問の利益のために真理をつきとめ，これを上級学部に随意に使用できるように差し出す。いわば有用性に基づいた専門科学を真理の探究を目的とする哲学の批判的介入によって補完するのである。カントは，有用性という私的領域への傾きを持った専門的学術を牽制するために，大学という制度における，真理と公共性を求める哲学の重要性を強調しているのである。このカントの大学論において，近・現代の大学制度におけるメカニカル・アーツとリベラル・アーツの対抗的関係が原型的なかたちで現れている。

アーレントによれば，哲学的な内省がさらに進んでいくと，意識を超えて覚知できる人間の生の探究がすすむ（Arendt［1958］1998: 312＝1994: 487）。人間的生は有機体的なものであり，人間的精神の領域も，機械ではなく，成長し発展する有機体モデルで捉えられるようになる。アーレントはその点について詳細に論じていないが，その典型は，フリードリヒ・シェリングの同一哲学やヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの有機体的自然観の影響下に形成されたヘーゲル哲学であろう。そしてヘーゲルは有機体的なもの基礎にした精神哲学を基礎に，歴史哲学や社会哲学を展開した。

精神の領域も歴史的なプロセスとして把握されるとアーレントは指摘するが，その典型としてヘーゲルの歴史哲学を挙げることができるだろう。加えて，ヘーゲルが『法の哲学』として展開した社会哲学は，有機体的社会観を基礎に立憲君主国家の存立を哲学的に弁証するものであった。ヘーゲルの精神哲学を基礎とした歴史哲学と社会哲学が，後継のドイツ哲学に引き継がれ，近代歴史学，精神科学，社会科学の成立を促していく(5)。

6.「世界疎外」と公共性の危機

アーレントは，それまでの公的領域と私的領域の区分が失効した「社会的なもの（the social）」の勃興として近代社会の特徴を捉えている（Arendt 1958＝1994, 1960＝2015）。「社会的なもの」は，人間の「必要（needs）」に関わる物質的・経済的関心に関わる「労働」が「人間の条件」のヒエラルキーの最上位に競り上がり，他の活動である「制作」との境界も崩れ，公的な「活動（action）」もまた「労働」に従属的なることによって成立する。

アーレントによれば先に述べた工作人の勝利は一時的なものであった。自然科学の隆盛によって信仰の力が失われるが，生命の神聖さを強調し，

生命の維持を最高善とするキリスト教の教説が残存し，哲学的な内省においても種としての生命過程が潜在的に不死のものとして把握され，その利害が重視されるようになる（Arendt［1958］1998: 320-325＝1994: 497-504）。

そして生命を維持する「労働」こそが人間の条件のヒエラルキーの頂点に立つ。これによってアーレントのいうところの「社会的なもの」が完成する。ここにおける社会は，『人間の条件』の英語版では social であるがドイツ語版では das Gesellschaftliche もしくは Gesellschaft である(6)。いわゆる血縁や地縁に基づくゲマインシャフトと対比されるゲゼルシャフトは，古典派経済学の影響を受けたヘーゲルやカール・マルクスも用いた，貨幣を媒介にした契約社会を指すのであって，古代ローマに由来するソキエタスではない。

この人間の条件の変容は，資本主義経済の進展により，あらゆる価値の源泉として労働の価値が競り上がることを背景としている。アーレントによれば，その変容は，アダム・スミスの労働価値説に基づく古典派経済学や，同じく労働価値説に依拠したカール・マルクスの唯物史観に典型的に表現されている。スミスたちの古典派経済学は，政治経済学として一つの家計をともにする国家を考察するものである。スミスたち古典派経済学では，国家は公の空間ではなく私的な「家政（オイコス）」の領域として考えられており，そこでは共通世界としての公的な性格が希薄化していた。古代ギリシア・ローマ世界において成立した「人間の条件」を構成するヒエラルキーは，近代において「労働」を頂点とするヒエラルキーへと大きく転換してしまったのである。

そして，科学を媒介にしたテクノロジーの発展によって「制作」の領域が拡大し，それが人々の必要のためになされる「労働」の様式で行われるようになる（Arendt［1958］1998: 230＝1994: 362）。すなわち多くの「制作」の過程が，人々の間での現れを可能にする公的領域へと浸透した貨幣を媒介にした経済的交換によって賃金労働と化すのである。多種多様な制作を賃金は貨幣価値へと通分し，その貨幣を媒介にした交換によって人々は生命の必要を満たすことになる。

労働を基礎にした市場という交換を介した公共性は，政治的な活動力に基づいた対話を必要としないものであり，画一化された効用や利潤を追い求める。このように市場を介した経済的交換は，アーレントが言う「行動（behavior）」の画一化へと帰結する。また経済学などの社会科学や心理学など行動科学が勃興し，人々の行動様式が条件反射的な動物性の水準にまで引き下げられて把握されるようになる（Arendt［1958］1998: 45＝1994: 69）。

このような社会的趨勢によって，活動や言論の基盤を解体する「世界疎外」が生じる（Arendt 1958: 248-257＝1994: 403-415）。アーレントのいう「世界疎外」は，まず，公的に共有された制作物の総体である「共通世界」の多くが，近代的主体となった諸個人によって私有化される。次に世界が私的に所有されることで公的な世界が侵食され，人々がともにした共通感覚と「活動」の領域である「共通世界」が衰退していくことを意味する。その結果，他者たちとの共在としての「複数性」を失った人々は，自己へと投げ返され，動物的な「生命への配慮」に向かう(7)。

こうしてアーレントは，「工作人の勝利」は一時的なものであり，あらゆる価値の源泉として賛美される「労働する動物」の勝利になるという。この転換に伴ってヒエラルキーの頂点であった「理性的動物（animal rationale）」の位置に「労働する動物」が位置するとアーレントは言う（Arendt［1958］1998: 85＝1994: 139）。

アーレントは指摘していないが，他方で再生産の領域にかかわる労働の多くは，ケア労働の領域へと私事化されると考えられる。シルヴィア・フェデリーチなどのマルクス主義フェミニズムの論者が指摘するように，これまでの資本主義経済は，男女役割性別分業を基礎にしてきた（Federici 2004＝2017）。その結果，公的領域から排除された私的な「家政」の領域に留まることを構造的に強いられた女性たちが，近代社会においても，公私の区分が曖昧化した「社会的なもの（the social）」からも排除される傾向にあることを指摘しておきたい。

7. 近代における公共性と教養教育

アーレントの言うところの「社会的なもの」が成立した後にも，多くの思想家や学者たちが，公的領域を支える大学教育の役割とその重要性を強調してきた。職業教育にかかわる専門教育と市民的教養にかかわる「教養教育」との結びつきは，アーレントのいう，公と私の区分が曖昧になった「社会的なもの」を成立に対応している。

アーレントは，「社会的なもの」の勝利を観照や活動で育まれた人間性を退化させる動物化の危機として捉えている（Arendt［1958］1998: 322-323＝1994: 500-502）。動物化は，同時に「教養と人間性の危機」に直結している。アーレントによれば，古典古代のギリシアにおいて，人々の生に意味と尊厳を与えたのは公的なものの基盤であった共通世界であった。「労働」を頂点とし「観照」や他の活動力が従属する「社会的なもの」の領域において，人々はそのような現れの空間である共通世界から疎外され，公的領域における人格の輝きを失う傾向にある。

それでは人々に画一化を強いる市場交換が公的領域に浸透することで，アーレントが危惧するように人々の人間性も失われたのであろうか。決してそうではない，動物化に抗する人間性を可能にするための教育は，大学制度の中で，教養教育や一般教育という形で保持されてきた。

近代市民社会においても，公的領域を支える社会的制度の要は，教養教育あるいは一般教育であった。例えば，ジョン・スティアート・ミルは，『大学教育について』で，大学の目的は，熟練した法律家や医師，または技術者などの専門家を養成することではなく「有能で教養ある人間を育成すること」にあると述べている（1867＝2011: 12-19）。そして，専門技術を教育する以上に「有能で教養ある人間」を育成することこそが大学の目的であると主張する。

つまり，ミルにとって「有能な教養ある人間」になるためには，諸個人の人生の目的に適合する各専門分野だけでなく，一般教養教育によって物事を「包括的に見る力」を身につける必要があるのだ。そして，人間の知性が既知のものから，未知のものへと進む哲学的研究が含まれることをミルは強調している。またミルは，大学において，専門職に就こうとする人々が学び取るべきものは専門知識そのものではなく，その正しい利用法を指示し，専門分野の技術的知識に光をあて正しい方向に導く「一般教養（general culture）の光明」であるという（1867＝2011: 14）。

ジョン・デューイの理念に基づいたアメリカのラボラトリースクールを高く評価する宇沢弘文は，デューイの教育が「リベラルな，社会的存在としての人間」の育成を目的とする三大原則に基づいていることを指摘している（宇沢 2013）。その三つの原則とは，異なった地域や背景を持つ人々が他者とともに生きる術を学ぶ「社会統合の役割」，生来の能力を伸長させながら「バランスの取れた教育」を行うこと，そしてその「時代の最高の教育」を与えることであると言う。宇沢は「リベラルな教育」が社会的共通資本としての教育の原点であるという。

ミル，デューイ，宇沢たちの主張に見られるように，近代においても他者とともに生きる自由市民としての「徳（能力）」を高める教養教育が不可欠なものであると認識されてきた。大学では，単に専門人を養成するだけでなく，「有能な教養ある人間」の育成を目的としたリベラル・アーツもしくは一般教育が重視されてきたのである。

カントが大学という制度において，学術的な真理という「観照」の次元を不可欠なものとして重視したとするならば，ミルやデューイは，学術的な真理を求める哲学的な「観照」だけでなく，社会の中における自由市民としての政治的な「活動」の次元を教養教育の目的として位置付けたと言えるだろう。

ミルとデューイにとって大学は単なる専門教育機関ではなく，同時に近代社会の担い手である自律的な市民たちの「徳（能力）」を育むことを目的とする教養教育を不可欠とする教育機関なのである。

他方でフンボルトの理念として，国家からの「学問の自由」が唱えられ，専門分化した学問の教授を基礎にして，教育と未解決の問題に取り組む研究が一体化したゼミナール方式が導入される

ことになった（吉見 2011）。

フンボルトが提唱した高度な専門研究と専門教育が一体化した研究教育機関として大学は，近代社会が高度に機能分化してゆく際の不可欠な要素となった。フンボルトの理念に導かれ，大学という制度の内に位置づけられた専門性を高めていく諸学が，研究によって高度化していく専門知を教育の場に結びつけていったのである。そして専門分化していく諸学に，社会的有用性に仕える技術的・工学的なメカニカル・アーツの諸分野が多く参入していった。

デューイは，『民主主義と教育』の中で，有用性に基づく「技術的な専門知」と「教養」の二元論的対立にどのように折り合いをつけるかが民主的社会の教育の課題であることを指摘している（Dewey 1916＝1975: 105）。本稿では，この専門知と教養知の対抗関係をメカニカル・アーツとリベラル・アーツの対抗的関係として把握するが，このデューイの指摘した課題は，より困難な問題として現代に回帰している。

絹川正吉は，戦後日本における新生大学の「一般教育」のモデルになった「コナント報告書」を参考にして，一般教育と専門教育の違いを論じている（絹川 2006: 77-78）。コナントによれば，職業に結びつくのが専門教育であり，一般教育は，ヒューマンかつシティズンに関するものである。コナントが指摘するように，「歴史」という科目は，教育の目的によって，専門科目にもなるし，教養科目にもなりうる。

戦後の日本の大学教育においても，この古典古代以来の人間性を高めるリベラル・アーツの伝統に連なる一般教育を重視する可能性が存在したが，絹川は，専門教育の立場から否定的な扱いを受けたことを指摘している。

8. 新自由主義の台頭と「教養と人間性の危機」

ミルやデューイの大学教育に対する懸念は，大学教育において，専門教育の比重が高まり，教養教育が軽視される傾向によって現実のものとなっている。

1970 年代に財政赤字と税負担に苦しんでいアメリカやイギリスで政治的主導権を握った新自由主義者たちが，福祉や公共サーヴィスを縮小することで，税負担を軽減するとともに公的事業を「民営化＝私有化（privatization）」した。さらに新自由主義的政策は，大幅な規制緩和によって，市場原理に基づき，競争的な環境を作りだすことによって，経済を発展させることを目指した。その結果，公共財の領域が縮減されてきた。

デヴィッド・ハーヴェイやマイケル・ハートとアントニオ・ネグリなどの指摘によれば，新自由主義の企図は，競争的環境を創出することよって経済発展を実現するものというよりは，資本家たちが階級権力を回復するための政治的プロジェクトとしてはじまった（Harvey 2005＝2007, Hardt and Negri 2009）。競争的な経済環境を作り出すこと以上に，公共財に関わる公的事業を民営化＝私有化するとともに税負担を軽減することで，いわば貧者から富者に富を再分配し，貧富の格差を拡大するものでもあった。

このような批判的観点からすると資本主義の拡大再生産を可能にする技術革新を競争的環境を創出することで果たそうとする試みは，ヨーゼフ・シュンペーターの「イノヴェーション」の概念をイデオロギーとして用いる傾向にあることが分かるだろう。社会統合の危機の乗り越えを市民たちの政治的な「活動（action）」によってではなく，技術の進歩によって果たそうとする試みが「社会的なもの（the social）」の領域で前景化する。フォーディズムという資本の蓄積体制の機能不全とともにフォーディズム的な「労働する動物」からポスト・フォーディズム的な「工作人」へのヒエラルキーのイデオロギー的転換が生じたと言えるだろう。アーレントは「労働する動物」の勝利と述べたが，現代におけるテクノロジーの進展を背景にして「工作人」のイデオロギーもまた強固なものとなっている(8)。

さらに新自由主義は，社会過程の中に浸透し，一般化していく。ウェンディ・ブラウンは，現在の新自由主義は，単なる経済過程や政治過程に還元することのできない統治理性である「新自由主義的理性」と化しているという（Brown 2015＝2017）。マキャベリの国家理性が自己目的化した

国家の力を増大することを政治家に指示するとするならば，新自由主義的理性によって，人々は，市民としてではなく，経済競争に晒されたホモ・エコノミクスとして自己を把握し，自らに自己投資する「人的資本（human capital）」として振る舞うことを強いられる。新自由主義的理性は，経済的に捕らえられた存在のあらゆる側面を，資本を効率的に拡大する手段とする。

新自由主義的理性の前では，民主主義は，新自由主義的な統治へと次第に置き換えられていく。新自由主義的理性と親和的な「グッドガバナンス」や「ベストプラクティス」などの経営学的術語などが政治過程を侵食し，次第に対話的な民主主義が侵食されてしまう。こうした新自由主義的理性による統治の浸透が，人々の市民的想像力を委縮させ，公共性の危機を深刻化させている。

この新自由主義的理性の浸透とその統治によって，教育の領域も大きな影響を受けている。マーサ・ヌスバウムによれば，新自由主義政策によって競争が激化することで混乱がもたらされ，デモクラシーを可能にする諸能力が見失われつつある（Nussbaum 2010＝2013）。このような傾向に抗すべく，ヌスバウムは，今日の教養教育の危機について，警鐘を鳴らしている。

各国が経済成長の追求に躍起になり，利潤のための教育が求められ経済成長を目的とする，一人あたりの国民総生産にもとづく「開発パラダイム」が大きな支持を集めている（Nussbaum 2010＝2013: 26）。その結果，技術系の大学や学部に大きな予算や得点が与えられ，人文学に対する予算が削られている。この人文学こそが，真理を目的とする「観照」や「活動」にかかわる知を保存し，伝統的な市民的教養を育む重要な役割を担ってきた。

現在では「観照」や「活動」を支える人間性を育んだリベラル・アーツが大学においても，有用性を目的とするメカニカル・アーツに圧倒されつつある。あるいはリベラル・アーツがメカニカル・アーツに従属するだけでなく，新自由主義的理性によって競争を強いられるネオリベラル・アーツへと転じてしまう傾向にある(9)。

大学において人文学が衰退することは，アーレントのいうところの「観照」と「活動」が衰退し「教養＝人間性」が失われることと同義であると言えるだろう。リベラル・アーツの軽視は，有用性を追求するメカニカル・アーツが産業社会において重視されるようになっていることと連動している。ここに現代において「労働する動物の勝利」から「工作人の優位」へと向かう潮流を見て取れるだろう。

産業社会の隆盛と結びついた「開発パラダイム」に対抗すべく，ヌスバウムが提唱するのが「人間開発モデル」である（Nussbaum 2010＝2013: 32）。この「人間開発モデル」を構築するにあたってヌスバウムは，人文学の復権と芸術の重要性を説いている。人文学が育む諸能力は，「批判的に思考する能力」，ローカルな執着を乗り越えて「世界市民として世界の諸問題に取り組む能力」，そして「他人の苦境を共感を持って想像する能力」であるとヌスバウムはいう（Nussbaum 2010＝2013: 26）。

その中でも批判的に思考する能力は，西欧の伝統的なリベラル教育の理論と実践の中心をなしてきたという。生活を吟味する批判的能力は，ソクラテスの反権威主義的な「批判的問いかけという理想」と結びついているという（Nussbaum 2010＝2013: 63）。アーレントも指摘していたが，ソクラテス学派が掲げた真理の批判的吟味による探究こそが「観照」の原初的モデルである。またソクラテスは対話術を用いて市民に積極的に語りかける「活動」によってアテナイの民主主義を矯正しようとした（プラトン 1964）(10)。こうしたソクラテスの試みが西欧の伝統的なリベラル教育のモデルとなると言うヌスバウムの主張は首肯しうるものである。

またヌスバウムは芸術の重要性についても触れている。芸術家は，いかなるイデオロギーにも奉仕せず，常識に囚われず，新しい見方で世界を見るように想像力に働きかけるとヌスバウムは言う。そして芸術の最も重要な貢献は，感情や想像力といった人間的資質を高めることで，自己や他者を理解する能力を育むことにある（Nussbaum 2010＝2013: 132）。ヌスバウムは，有用性の追求によって生じる公共性の危機に際し，人文学と芸

術を用いた教育を重視する「人間開発パラダイム」に依拠して対抗することで，民主主義の再生を目指している。

9. 公共社会学の試み

先に述べたヌスバウムのいう「人間開発パラダイム」は，従来の人文学のパラダイムに依拠したものであり，必ずしも現代の複合危機に十分に対応できるものではない。そこで，現代の複合危機とそれに対応しようとする現代社会学の重要な動向について論じていこう。

アメリカ社会学会の会長であったマイケル・ブラウォイが2005年に「公共社会学のために」という会長講演を行った（Burawoy 2005）。この講演で批判理論の系譜に連なるヴァルター・ベンヤミンの「歴史哲学テーゼ」の一節を引用し，社会学を「危機の時代」に舞い上がる歴史の天使として比喩的に捉えている。

ブラウォイは，現代の危機に対応することを試みる社会学的プロジェクトが公共社会学であり，あらゆるものの「民営化＝私有化（privatization）」に対する応答の一部であると述べている。またヌスバウムの人文学に対する懸念と同じように，リベラルな学問に対する評価が下落し，大学における予算の削減などに直面し，「公的なもの」にかかわろうとする学問の危機的状況についての懸念をブラウォイも表明している（Burawoy 2005: 6-7）。

ブラウォイは，アメリカの社会学の伝統を踏まえながら，社会学の在り方を「専門的社会学（professional sociology）」「政策社会学（policy sociology）」「批判社会学（critical sociology）」「公共社会学」の四つに分類している（Burawoy 2005: 9）。

「専門的社会学」は従来の社会学において分化した研究プログラムを持ち，それぞれのプログラムが新たな研究を生み出している。いわゆる社会学内部における連字符社会学とその細分化・更新されていくプログラムであると言えるだろう。次の「政策社会学」は，行政や企業などのクライアントが設定した目標に取り組み，その評価や解決策を提供する社会学である。

公共社会学は，社会学者と対話する，学生を含む一般市民である「公衆（publics）」との関係を基礎に置く。社会学者と公衆が，お互いの課題や提言を持ち寄り，調整することで問題の解決に取り組む（Burawoy 2005: 7）。ブラウォイは，公共社会学を政策社会学の「良心（conscience）」であると言う（Burawoy 2005: 10）。

また公共社会学では，しばしば共有されない価値観や目標が議論の前提に含まれることがあるので，ハーバマスの言う熟議が必要になるとブラウォイはいう（Burawoy 2005: 7）。公共社会学は，このように社会学者と一般市民との対話を発展させ，より良い市民社会を構想し，実現することが目的となる。

四つ目の批判社会学の役割は，専門社会学の研究プログラムの基盤について批判的に検討することでそのバイアスや限界を知らせ，社会学の規範的側面を検討するものである。それらの批判的検討に基づいて新たな研究プログラムの促進が可能になるという。ブラウォイは，批判的社会学を専門社会学の「良心（conscience）」と呼んでいる（Burawoy 2005: 10）。

アメリカにおける従来の社会学は，専門家の中で自閉的になっていた専門的社会学と企業と政府の資金に依存する政策社会学の在り方が主導的であった。この二つの社会学がもたらした状況を乗り越えるべく，ブラウォイは，市民との対話を志向し，民主主義に活力を与える規範的プロジェクトとして公共社会学を提唱しているのである。

ブラウォイによれば，この四つの社会学は相互依存的なものであり，時には境界を越境し，他の領域へと影響を与える関係にある。その影響関係によって四つの社会学は，しばしばシナジー効果を発揮する（Burawoy 2005: 15-17）。

公共社会学と政策社会学は，前提となる専門社会学の専門的知識に依存するものである。また批判的社会学も，専門社会学という批判の対象がなければ存立し得ないとブラウォイは指摘する。専門社会学と公共社会学は，相互に尊重すべき双子のような存在である。政策社会学は，貧困や教育に関する研究など通じて不平等の社会学に再びエネルギーを注入し，市民たちとの対話を促すこと

で公共社会学にも大きな影響を及ぼしている。

また専門的社会学は科学的規範に基づいて自己を正当化し，政策社会学はその効果に基づいて正当化し，公共社会学は関係性に基づいて正当化する。そして批判的社会学は規範的・道徳的ビジョンを提供することで，社会学を発展させるものであるとブラウォイは主張する（Burawoy 2005: 15）。

他の社会諸科学と社会学の関係について，ブラウォイは，経済学の立場が「市場とその拡張」であり，政治学の立場が「国家と政治的安定の保証」であるならば，社会学の立場は「市民社会の拡充と防衛」であるという（Burawoy 2005: 24-25）。ブラウォイは，現代を「市場の専制と国家の専制が続く時代」として捉え，社会学はその公共的側面において，人類の利益を擁護するものであるという。また公共社会学の成功は，社会学者が公共社会学の重要性を認識し，アカデミズムを超えて社会運動として進めることで実現可能となると述べている。

ブラウォイの公共社会学の提唱に対して，クレイグ・キャルホーンは，その意義を認めつつも，公共社会学は，市民社会の専制・市民社会の物心崇拝を避けるべきであると指摘した（Calhoun 2005）。キャルホーンは，市場と国家との相互連関のなかに市民社会が存在しているのであって，よりよい市民社会は，よりよい市場とよりよい国家とともにある。キャルホーンの指摘するように経済学や政治学と敵対的になるのではなく，公共社会学は他の社会諸科学と対話を重ね，専門分化によって分断された社会諸科学の総合へと向かわなければならない。

こうしたキャルホーンの指摘は，公共社会学にとって重要なものである。かつてロバート・ベラーは，「公共哲学としての社会科学」を唱え，西洋の哲学と人文学と結びついた社会科学の伝統と基盤を指摘し「良き人々と良き社会の仮説」を唱えることの重要性を論じた（Bellah1985＝1991）。ベラーは，その実現のために社会科学は，哲学や人文学と結びつく必要があるという。公共社会学もまた，他者との対話を求める規範的社会科学として，ベラーが提唱していたように哲学と人文学との垣根を超えていかねばならない。

10．4つの社会学と「人間の条件」

ブラウォイは，アメリカ社会学の伝統を背景に「専門的社会学」「政策社会学」「批判社会学」「公共社会学」の区分を論じた。アメリカでは，社会学は，「公共社会学」としてはじまり，「専門的社会学」や「政策社会学」へと発展し，現在では規範的プログラムである「公共社会学」へと転回すべきであるとブラウォイは説いている。

その際，公共社会学の可能性と落とし穴をより良く理解するために，ブラウォイは，デューイ，ハーバーマス，アーレントなどの業績にとり組む必要があるという（Burawoy 2005: 8）。ここでは，これまでの本稿のアーレントについての議論を踏まえて，ブラウォイの4つの社会学についてアメリカ以外の社会学史に即して手短に評価しておきたい。

まず政策社会学であるが，社会学の祖と言われる，フランスのオーギュスト・コントの社会学にその源流を見ることができる。サン＝シモンの産業主義の影響下に，コントの社会学は，科学者と産業者による統治という，産業化と社会統制のために手段として科学を用いる社会工学的志向性のもとに提唱された（Musso 1999＝2019）[11]。自然法則や社会法則に精通した実証主義を標榜する科学者と産業者による統治を志向したコントの社会学は，必ずしも民主主義と親和的ではない。いわばアーレントのいうところの工作人による「制作」を志向する社会学であった。社会学には最初から「制作」を政治に持ち込む「政策社会学」と親和的な傾向があった。サン＝シモンの弟子たちが，「馬上のサン＝シモン」と呼ばれたシャルル・ルイ＝ナポレオン・ボナパルト（ナポレオン3世）の独裁に協力し，産業主義を押し進めていったことからもその親和性がわかるであろう。

専門的社会学は，コントの実証主義を引継ぎながらも，他方でドイツの観念論的伝統の流れを汲んだマックス・ヴェーバーの「価値自由（Wertfreiheit）」の理念が象徴するように，「存在（Sein）」と「当為（Sollen）」を峻別する。専門社会学は，規範と結びついた価値判断を禁欲的に留

保して「存在」を科学的に認識しようとする「観照」的傾向を持つ。またゲオルク・ジンメルの形式社会学は，社会を可能とする社会化の超越論的な「形式（Form）」から社会を把握しようとした。けれどもアーレントが指摘するように近代では，永遠の不変の「存在」は，歴史的に生成する「過程」へと変容している。カントの超越論に影響を受けながらもジンメルもまた社会を「社会化（Vergesellschaftung）」という流動的なプロセスとして把握していた（Simmel［1908］1992＝1994）。そしてヴェーバーは，「理念型（Idealtypus）」を用いて，一度しか生じなかった歴史的出来事を科学的に認識するための方法論を練り上げた（Weber［1904］1982＝1998）。

ドイツ観念論と新カント派の価値哲学の流れを汲んだジンメルやヴェーバーの系譜を引き継ぐドイツ社会学は，存在の真理を求める「観照」的志向を有するものであったといえよう。また価値判断と事実認識を峻別したヴェーバーは，価値判断は控えるものの，社会学者として社会学の研究成果を，国家の社会政策のための素材として提供しようとした（Weber 1919＝1980）。ドイツ社会学も容易に「政策社会学」へと転回しうる志向性を持っていた。

フランスのエミール・デュルケムは，コントの実証主義的な社会学を引き継ぎながら，「社会的事実（faits sociaux）」を基礎に実証主義的な方法論を練り上げ，統計などの科学的手法を用いた（Durkheim 1895＝2018）。デュルケムもまた，当時のパラダイムというべき社会有機体論を批判的に継承し，社会進化という仮説に立っていた。統計データに基づいた『自殺論』などは政策社会学へと容易に転用可能であろう。デュルケムの社会学も，ヴェーバーと同様，国家や社会集団による「制作」のための素材を提供する役割を積極的に担おうとした(12)。

この三人の方法論を源流とした専門社会学は，理論的な一般社会学とさまざな連字符社会学に分化し，現在に至っている。

批判的社会学は，マルクス主義とフェミニズムによって活性化されたとブラウォイは，指摘していた（Burawoy 2005: 20）。それらの思想的・実践的伝統は，規範的・解放的側面を含んでいる。批判社会学は，「観照」と「活動」の批判的側面であるソクラテス的伝統に基づくものであるといえよう。カントからヘーゲルへと至るドイツ観念論と，それらを転倒したマルクスの史的唯物論の伝統は，解放的関心に基づいた批判理論を提唱したフランクフルト学派に引き継がれた。フランクフルト学派の依拠する「全体性（Totalität）」の理念は，単なる理論理性に基づく事実認識を超えて，「より良い生き方」を求める実践理性による規範的探究を含んでいる（Adorno 1968＝2001）。

従属的な立場に置かれていた女性たちの解放を求めるフェミニズムも，従来の学術的パラダイムを揺るがす新たな規範的ビジョンを提起してきた。

公共社会学は，アーレントのいう実践的な「活動」的側面を志向している。この公共社会学は，ブラウォイのいうようにアメリカの社会学的伝統から発していると考えられるが，その国を問わず，アカデミズムやその外部にいる多くの社会学者たちが実践的に取り組んできたものでもある。またブラウォイも高く評価するハーバマスの社会理論は，コミュニケーション的理性に定位した，対話を志向する規範的社会学でもある。ハーバマスの規範的社会学は，アメリカ社会学の流れとは異なる公共社会学の大きな源泉の一つであろう。

ハーバマスの規範的社会学は，ドイツ観念論とマルクスの理論に強い影響を受け，ホルクハイマーやアドルノの批判理論をコミュニケーション論的に転回したものである（Habermas1999＝2022）。キャルホーンが指摘するようにハーバマスのコミュニケーション論と討議倫理学は，コミュニケーション論を基礎に「実践理性が制度化」されたものである（Calhoun 1992＝1999: 12）。ハーバマスの規範的社会学は，「活動」としての政治を活性化するものであり，市民社会と民主主義に活力を与えてきた。

古代アテナイの民主主義に伴走したソクラテスの対話術のように公共社会学は，公的な次元で市民との対話を求める。市民社会と社会学の再帰性に着目したアンソニー・ギデンズの「二重の解釈学としての社会学」や，ジクムント・バウマンが

唱えた「自由の社会技術として社会学」もまた市民との対話を重視する公共社会学の伝統に数え入れて良いだろう（Gidenns1982＝1992, Bauman 2014＝2016）[13]。

公共社会学は，21世紀の市民社会における「活動」を支える市民的実践ための研究・教育プログラムとなりうるだろう。民主的な対話を通じて実際に社会運動と合流することで，公共社会学は，現代の市民たちが担う新たな「活動（action）」に資する社会学となるだろう。

11．社会学的想像力の更新と「地球規模での生態学的危機」

ブラウォイの公共社会学への日本における応答についても触れておきたい。盛山和夫と上野千鶴子が編者となった『公共社会学1』『公共社会学2』の2巻の出版は，現時点で最も注目に値する応答であろう。

公共社会学の提案を受け止めた盛山和夫は，21世紀の危機的な社会状況と社会問題に取り組み，規範性を回復する「秩序構想・共同性の理念の探求」するものとして公共社会学を把握した（盛山2012）。他の社会諸科学からの「調査屋扱い」されてきた上に，多様に拡散した社会学は学術的共同体としての解体の危機にあると盛山は言う。社会学がアイデンティティを再構築することでこの危機的状況を脱却する試みの一つが公共社会学なのである。

また上野千鶴子は，公共社会学の試みを「共通善」や「公共の幸福」を問題とし，それを引き受ける「規範科学としての社会学」を再生するものであり，「社会構想の学」としての社会学への原点回帰である主張している（上野2012）。その際，設計科学・評価科学としての社会学ではなく，理論的・実践的課題としての「新しい公共」を探究するものであり，福祉社会学がそのアリーナとなると上野は指摘している。それに加え，上野は，公共社会学が社会学者に「公人として振る舞う（Public Going）」と，公的領域に介入する「公共的知識人」「行動的社会学者」であることを促すという。

上野が指摘するように「福祉」にかかわる問題は，公共社会学にとって非常に重要な領域となる。社会福祉学は，社会権と結びついた制度的な「ウェルフェア（welfare）」の学を超えて，より広範に福祉を把握しようとする「ウェルビーイング（well-being）」の学へと向かう学際的な志向性を持っている。WHO憲章で示された「肉体的にも，精神的にも，社会的にも，全てが満たされた状態」を指すウェルビーイングの理念は，「より良き生」を求める規範科学を志向する公共社会学を牽引する理念となりうる。社会福祉学と福祉社会学の連携は，公共社会学にとっての重要な対話の場となろう。またこのウェルビーイングの理念は，すぐ後に述べるが現代の地球環境問題と不可分な「生態学的にも満たされた状態」を要求するはずである。

ブラウォイも社会運動と結びつかなければ，公共社会学の成功はないと述べていたが，上野の実践への志向性は，市民社会を活性化するための実践的能力を要求するものである。ブラウォイや上野の標榜する公共社会学は，社会運動と結びつくために，市民との対話するための能力を涵養する必要があるだろう。アーレントの術語で言えば「活動（action）」を行うために「アレテー（徳）」を高めるための教養が必要となろう。その際ピエール・ブルデューが言うところの文化的エリートが蓄積する文化資本以上に，ロバート・デヴィッド・パットナムが強調した人と人とを結び付けてゆく社会関係資本を獲得するための能力が要求されるはずである（Bourdieu 1979＝1990, Putnam 2000＝2006）。あるいは，社会学者だけでなく，社会学を学ぶ学生を育むための基本的教養として，社会関係資本を育む能力を身につけるための教養教育が必要となろう[14]。

現代のステークホルダー資本主義，ESG投資，ESG経営，エシカル消費などに見られる「社会的なもの」の浮上には，アーレントのいう，等価交換を基礎とした契約的な「ゲゼルシャフト（Gesellschaft）」としての社会とは異なった要素が含まれている。その要素は，強いていうならば，政治的目的を有し公的領域を設立する古代ローマ的な「ソキエタス（societas）」としての社会の現代的な復活である（Arendt 1958: 23-24＝1994: 44-

45)[15]。民営化・私有化を基調とする新自由主義的理性の統治下で見失われつつあった，世界を構成する「コモン（common）」と，現代における複合危機の深刻化とともに新たなかたちで「ソキエタス」が回帰していると把握できるだろう。

アーレントのいう「世界」を構成する核となるコモンが民営化＝私有化されることで「世界疎外」が生じ，同時に「観照」と「活動」で育まれた人間性が弱体化する。その結果，動物化が進み「労働する動物の勝利」へと至る。その勝利は，ポストフォーディズムに適合的なテクノロジーとイデオロギーと化したイノベーションの賞揚によって「工作人の優位」へと向かっている。だが，たんに己の私的な「生の配慮」に終始するのではなく，加速主義のような技術至上主義でもない「ソキエタス」の現代的回帰は，実践理性と結びついた規範的行為によって，公的領域の再建が進みつつあることを証している。

またグローバルな取り組みとしてSDGsの取り組みも注目に値する。かつて開発経済学に基づいた取り組みであった国連を中心とした発展途上国の開発の取り組みが，地球環境問題の深刻化を受け，先進国の経済活動も含んだ環境に配慮する「持続可能性（sustainability）」に重点を置くようになった。SDGsの取り組みは，開発され，搾取・収奪され続けてきた資源としての物質的な地球ではなく，私的所有に馴染まない公的な「コモン」としての生態学的な地球を前景化させている。いわば地球規模での気候変動や環境破壊によって経済的開発の限界が自覚されるとともに，地球のコモンとしての性格が顕になり，現役世代だけでなく未来世代を含んだ責任倫理が要求されているのである。

ブラウォイも公共社会学は「民営化＝私有化（privatization）」に対するリアクションであると述べていたが，地球環境の悪化と持続可能性の危機もまた「民営化＝私有化」によって生じたコモンの危機であるといえる。いわば生命を含んだ事物の生態学的なネットワークの蠢きが，人間による制作物の総体としての「世界」の限界として顕になってきたのだ。この生態学的コモンは，従来の「開発パラダイム」の問い直しを促すであろう。

クリストフ・ボヌイユとジャン＝バティスト・フレゾスが指摘するように「人新世」という概念は，人間の時代というよりは，社会的存在としての人間による地球環境問題の制御の困難と圧倒的な無力さの到来を告げている（Fressoz and Bonneuil 2016）。この人新世に生じる諸問題は，単に科学技術で解決しうるものでなく，政治的対処を迫るものである。

この自然と社会を横断する危機的状況は，批判的社会学の核心でもある全体性とかかわる社会哲学による領域横断的な問い直しを要請する。

批判的社会学の中に数え入れられるフランクフルト学派のホルクハイマーやアドルノは，道具的理性による自然支配を糾弾した（Horkheimer und Adorno 1947＝1990）。啓蒙された人間による内的自然支配と外的自然支配の限界が，現代の複合危機として現れ，それが今や地球のコモンとしての性格を顕にするまでとなった。現在の複合危機は，生命とモノの総体としての世界と結びつく，活動に基づいた共同統治としての「新たな共和制（res＝物　publica＝共有の）」を要請していると言えよう[16]。その「新たな共和制」ための共通感覚は生じつつある。その共通感覚の形成と拡大は，「地球規模での生態学的危機」を共有することが一つの先駆けとなろう。

例えばスラヴォイ・ジジェクは，コロナ・パンデミックを生化学上の問題だけでなく，自然の中の我々の位置や社会的・イデオロギー的関係などの複雑な全体性に根差した何かとし捉えなければならないと述べている（Žižek 2021＝2021）。このコロナのパンデミックとして共有された危機的状況を真面目に捉え「一種の急進的な倫理的変化」「新しいグローバル倫理」が必要であるとジジェクは主張している。

複合危機を構成する「地球規模での生態学的危機」は，アーレントが重点的に論じることのなかった，もう一つの「人間の条件」を浮上させている。新自由主義的理性によって牽引される「社会的なもの」の拡大は，ナショナルな規模での「家政＝経済」をグローバルな「家政＝経済」へと転換させるものであった。

ディペシュ・チャクラバルティは，科学技術を媒介にしたグローバルな「家政＝経済」の拡大によって，地質学的・生物学的な領域への影響が進み，アーレントの言う「人間の条件」を変容させていることを指摘している（Chakrabarty 2016＝2023）。人新世と呼ばれる時代において，新たな人間の条件として「生物学的・地質学的条件」について考察する必要が生じているとチャクラバルティはいう。

生命を含んだ事物のネットワークとしての世界が，実際に気候変動やコロナのようなパンデミックのかたちで，人間のコミュニケーションの領域である生活世界へと不可分なかたちで浸潤している。この「生物学的・地質学的条件」が，アーレントの指摘する人間の条件の生態学的基盤となっているのだ。

チャクラバルティは，人間の歴史によって政治的に分断された人間中心主義的な「人間（humanity）」の物語から，惑星の地質学的・進化論的歴史から把握される生命中心主義的な「人類（anthropos）」の物語へとシフトする必要性を論じている。

地質学的地球と生態学的な生命と事物のネットワークは，まさにコモンであり，グローバル化した生態学的危機は，アレントがいう「活動」を媒介にした新たな倫理に基づく共同統治としての「新たな共和制」を必要としている。また『人新世の人間の条件』の訳者であり，チャクラバルティと対話した早川賢治は，他の動植物や地質学的な次元をも射程に入れた「惑星的公共性」を提唱する（Chakrabarty 2016＝2023: 172）。

歴史的出来事ともいうべき「地球規模での生態学的危機」は，従来の「人間性（humanity）」の世界から見れば，事物の反乱・蜂起ともいうべき事態であろう。インターネットという新たなネットワーク・メディアの急速な発展によって，多元的かつ双方向的となったコミュニケーションに乗って「地球規模での生態学的危機」がグローバルな次元で共有され始めている。チャクラバルティの言説も新たな「活動（action）」を構成する「言論（speech）」であり新たな「人類（anthropos）」の物語である。新たなメディア環境の中核となるインターネットというネットワーク・メディアを媒介にして，分断や混乱を含みつつも，多元的な言論と物語を共有することで，私たちは新たな共通世界を創出しはじめている(17)。

これまで述べてきたように複合危機を構成する「社会統合の危機」「地球規模での生態学的危機」「教養と人間性の危機」という三つの危機は，相互に深く結びついている。資本主義経済のもとで私有化されてきた自然は，生態学的危機とともに「コモン」として公的性格を露わにし，その対処を私たちに迫っている。21 世紀的な複合危機に対処しようとする規範科学としての公共社会学は，社会学的想像力の翼を広げ，より良い未来を求め積極的に公共圏に参画し，他の市民たちだけでなく，自然科学を含めた他の諸学との対話を求める。公共社会学は，このような「活動」に基づいた語らいの中から，新しい市民社会の在り方を構想し，より良い未来のための選択肢を提案していかねばならない。

結び．ポストヒューマン的窮状と「条件なき大学」

さて，ここまでアーレントの「人間の条件」を縦軸に論じてきた。古典古代のギリシア・ローマを基準にしたヒエラルキーと排除を含んだその構成を，現代の私たちがそのまま受け入れることはできない。特に奴隷と女性を公的領域から排除し，私的領域へと押し込んだ「人間性（humanitas）」の概念を，現代において，そのまま通用させるわけにはいかない。また現代の複合危機は，古典古代のギリシア・ローマに由来し，西洋近代へと継承され，培われてきた「人間性（humanity）」の概念と不可分なものである。

現代の人文学は，従来のヒューマニズムを批判的に捉えつつある。その状況をロージ・ブライドッティは，「ポストヒューマン的窮状」と呼ぶ（Braidotti 2013＝2019: 10）。この窮状を受けた多くの人々がポストヒューマン的探究に向かい，万物の尺度となっていた西欧近代のヒューマニズムを批判的に考究し，その内実を更新しつつある(18)。

現代の公共性の危機と複合危機に対応すべく対

話的な民主主義の活性化を目論む公共社会学もまた，フェミニズムとともにジェンダーの社会学を練り上げてきたように，新たな人文学と対話を交わしながら従来のヒューマニズムに対して批判的検討を加えねばならないだろう。

ジャック・デリダは，有用性へと傾く現代の大学に対抗すべく，「条件なき大学」という大学制度の新たな可能性を提示している（Derrida 2001）。デリダは，カントの「諸学部の争い」に倣うかのように，現代においても真理の探究を推し進める「新しい人文学」を実現するために公共圏の一部を構成する大学には「すべてを公的に言う権利」が不可欠であるという(19)。政治的・法的・経済的な力が大学を私有化しようとする場合，それらの有用性を求める社会的諸力に対して，創造的に抵抗する力としての「すべてを公的に言う権利」という無条件的な権利を大学人たちが考案し対抗していかねばならないとデリダは主張する。この「すべてを言うこと」が自由の可能性の条件になっているとデリダはいう。それはカントの「公共性（Öffentlichkeit）」以上のものであり，文学に代表される「虚構（フィクション）の権利」や，偽証やサバルタンの問題圏も考慮に入れたものである。西洋の伝統に根ざした啓蒙的なカント的公共性を超えた「すべてを公的に言う権利」が権力を欠いた抵抗や反逆の原理であり，「ある種の脆弱な力であろうとも，力をもたないわけではない原理」であるという。

デリダの「条件なき大学」は，カントの啓蒙理性や大学論を脱構築し「人間性」を新たに規定する可能性を押し開き，「来るべき民主主義」を切り開くべく，その問い直しを行う（Derrida 2001: 13）。

新たな社会の構想を目指し，市民たちだけでなく，他の諸学との対話を求める公共社会学は，現代社会が要求する有用性に応えるだけでなく，過度な有用性の要求に批判的に対峙しなければならない。その規範的科学としてのプロジェクトを果たすためにも「すべてを公的に言う権利」によって開かれる，デリダのいう「条件なき大学」の一角を公共社会学も占める必要があるだろう。

デリダのいう「条件のなき大学」は，西洋に由来する「人間性」を問い直し，女性を私的領域に囲い込み奴隷をも必要とした「人間性（humanitas）」，私的所有権によって自然を領有する主体としての近代の「人間性（humanity）」を批判的に再検討するための知の拠点となろう。今日の「公共性の危機」に対して諸学が協力することにで，有用性に基づくメカニカル・アーツを基盤とした「開発パラダイム」の優位を打ち破る別のオルタナティブを見出さねばならない。それは従来の人文学と不可分な「人間開発パラダイム」を超えて，新たなポストヒューマンの探究と結びついたものとなろう。

最後に持続可能性を失いつつある現代の市民社会と対話する公共社会学は，キャルホーンが指摘していた社会諸科学だけでなく，よりエコロジカルである他の人類社会へとその想像力の翼を広げる必要がある。かつてデュルケムやマルセル・モースが，「無秩序（アノミー）」や戦禍に苛まれる近代市民社会の根源を捉え直すべく，人類学の領域へと踏み出したように，公共社会学は，社会科学の暗黙の前提となってきた資本主義経済と国民国家を相対化する外部的視点を必要としている。

例えば「科学技術社会学（STS）」を標榜した人類学者のブリュノ・ラトゥールは，自然と社会の二項対立を解消する「アクターネットワーク理論（ANT）」を展開し，従来の社会学に意義申し立てをした（2005＝2019）。ANT では人間と自然，生命と非生命など二項対立的な思考枠組みを批判的に乗り超え，物や機械，動植物と人間や制度がハイブリッドに寄り集まったネットワークとして様々な現象が生じることを論じている。

また社会人類学者のティム・インゴルドは，人類学を文献研究へと沈潜しがちな専門的な哲学と異なる「世界に入っていき，人々とともにする哲学である」とある定義している（Ingold 2018＝2020: 9）。大量虐殺やかつてない規模での環境破壊，圧倒的な経済的格差で苦しむ複合危機に晒された現代において，持続可能な「異なった未来の条件」を他者とともに探求しなければならないとインゴルドはいう。インゴルドは，他者を単に参与観察の対象やインフォーマントとして扱うので

はなく，ともに生きる技法を見つけようとする共通の任務を担う他者として対話し，その経験から学ぶ必要があると言う（Ingold 2018＝2020: 19）[20]。このように市民と異なる他者からも学ぶ姿勢を公共社会学も共有する必要があろう。

現代の複合危機に対応する公共社会学は，将来世代を含んだ市民や人類学的な他者だけでなく，他の社会諸科学・人文学・自然科学などの学問領域との横断的な対話を積極的に求める総合社会学として，その社会学的想像力を不断に更新していかねばならない[21]。

注

(1)「複合危機」とはフランスの社会学者エドガール・モランによる造語であり，マーク・スイリングなどによって検討された概念である（Morin and Kern 1999, Swilling 2013）。その意味は，単一の原因に還元できない，グローバルに相互作用する社会的・経済的・生態学的・文化的・制度的な危機が入れ子状態になっていることを指す。また複合危機について警鐘を鳴らした先駆者としてフェリックス・ガタリがいる。ガタリは，講演「三つのエコロジー」の中で，3つのエコロジー的な作用領域として環境・社会的諸関係・人間的主観性という作用領域とその倫理的－政治的な接合の重要性を指摘し，それを「エコゾフィー」と呼んだ（Guattari 1989＝2008）。

(2)「資本新世（Capitalocene）」の問題として，現代文明の持続可能性の危機を捉えた場合，脱成長やポスト資本主義という課題が浮かび上がってくる。いわゆる大絶滅の可能性があるこの問題について，ディペシュ・チャクラバルティは，地球温暖化の政治において分断と対立の政治を担ってきた人間中心主義の思想に基づくのではなく，地質学や進化論の歴史という大きなカンバスの上で思考する必要があると述べている（Chakrabarty2016＝2023: 96-98）。

(3) ESG 投資であるが，E が「環境（environment）」，S が「社会（soial）」，G が「企業統治（government）」を指す。欧州系の投資運用機関の多くが投資責任原則として ESG に配慮した投資の分析と意志決定を行うようになっている。2006 年当時，国連事務総長であったコフィー・アナンの主導で国連グローバル・コンパクトと国連環境計画金融イニシアチブが共同で事務局を担い，欧米の大手投資家たちの参加を得て，投資責任原則が策定された。この ESG 投資は，水口剛によれば 2017 年時点であるが，1701 機関，6820 兆円の運用総資産額であった（水口 2017）。ESG 投資という潮流に応えようとする多くの経営者が現れ，ESG に配慮した ESG 経営が国際的なトレンドになっている。もう一つのエシカル消費であるが，SDGs との親和性もあり，現在注目を浴びている。脱炭素，海洋プラスチック，フードロス，児童労働・強制労働などはじめとする様々な領域で取り組まれている（エシカル協会編 2022）。畑山要介によれば，市民的美徳に基づいた政治的行為であり，従来の消費社会に対する反消費主義の運動である（畑山 2021）。畑山は，哲学者のケイト・ソパーの議論を参考にして，消費は意味論的行為であり，その体験は審美的なモノであり，快楽を含んでいることを指摘している。

(4) この「ソーシャルなもの」は，この後に扱うアレントの「社会的なもの（the social）」とは異なる意味で用いている。第 11 節で論じる，政治的目的を有し公的領域を設立する古代ローマ的な「ソキエタス（societas）」としての社会の復活を構成する要素として「ソーシャルなもの」を捉えているので注意されたい。

(5) 論理学・自然哲学・精神哲学に及ぶ百科全書的全体性を誇ったヘーゲル哲学は，急速に影響力を失う。ヘーゲルの試みは，哲学から諸科学の分離が進む同時代においてもドン・キホーテ的な試みであった。諸学の分化というプロセスの進行とともに，ヘルベルト・シュネーデルバッハの言う「観念論の崩壊」が生じ，ヘーゲルの哲学は，プロイセンの国家哲学者としての世評を残して，アカデミズムの世界で忘却されてしまう（Schnädelbac 1984＝2009）。この「観念論の崩壊」とともに哲学が誇ってきた全体性もまたアカデミズムの中で見失われる。

(6) 河合恭平は，アレントの「社会的なもの（the social）」について論じる際にドイツ語版の das Gesellschaftliche, Gesellschaft と英語版の the social との違いに着目している。本稿では，その指摘を参考にした（河合 2020）。

(7) 齋藤純一は，生命の必要性が政治の主題となる時代に，アーレントの複数性が喪失する理由について 3 点ほど指摘している（齋藤 2002: 56）。まず，人間の身体と生命（ゾーエー）の「同一性（sameness）」は公共的空間における複数性と相入

れない。次に，生命の必要は身体の内部で共有されるので，誰の興味も引かない。そして生命の必要という「必然性（necessity）」は公共空間における自由と対極にある。

⑻ ポストフォーディズム以降における資本主義の危機をイノベーションという「制作」の力によって乗り越えようとする新自由主義のイデオロギーと連動した最新の思想の一つが「加速主義（accelerationism）」であろう。仲山ひふみによれば，加速主義のメッセージは，シンプルなものである。そのメッセージは，資本主義のもたらしたテクノロジーを介して，資本主義の「プロセスを加速」させ，資本主義それ自体の「外」へと脱出するというものである（仲山 2019）。仲山によれば加速主義は，ドゥルーズ&ガタリ，ジャン・ボードリヤール，ジャン＝フランソワ・リオタールなどのフランスのポストモダン思想の影響を受けている。仲山によれば，加速主義は，幾つもの実験的なかたちでマイナーな諸形態で展開されている。

⑼ 村澤真保呂によれば，日本における教養教育は，政府や産業界が望む教養になる傾向にある（村澤 2009）。そのため市場社会の競争で生き残り，国力を増大させるような人材教育となっている。その精神は「自由人を作る」ことを目的としたかつてのリベラル・アーツとはほど遠い。村澤は，現代日本の教養教育を企業や国家への忠実な「隷属者をつくる」ことを目的とした新自由主義時代の「ネオリベラル・アーツ」とでも言うべきものであると指摘している。

⑽ アテナイの民主主義を「血統が良いが動きの鈍い馬」に喩えたソクラテスは，その馬を覚醒させる自らの一刺しが必要であるとのべている。真理を探究する批判的哲学と結びついた対話術によってアテナイの民主主義を矯正しようともしたと解釈できるであろう。これは，現代における学問と政治とのかかわりを考える上でも興味深い点である（プラトン 1964: 46）。

⑾ 村澤が指摘するようにコントの社会学は，フランス革命後の混乱を背景に噴出してきた社会問題を実践的に治めることを志向していた（村澤 2022）。そのためコントの社会学は，専門的な学術研究領域ではなく，実践的かつ幅広い領域を含む知となり総合社会学として展開された。実践を志向するブラウォイの提唱する公共社会学は，その意味でコント的な総合社会学への回帰という側面を持っている。

⑿ アドルノによれば，ヴェーバーは「価値自由」の立場を掲げ，価値判断を社会学から排除しようとする点で実証主義に追従した（Adorno 1968＝2001: 137）。アドルノは，他方のデュルケムについて，ヴェーバーより実証主義的であったが価値判断を容認したと指摘している。またアドルノは，価値中立性が，どちらかに肩入れすることを放棄することによって実際には肩入れを果たしていることに注意すべきであると述べている（Adorno 1968＝2001: 121）。

⒀ バウマンによれば，社会学の任務は，変化しつつある世界に方向し，その結果を追いながら生活戦略を編み出すことである（Bauman 2014＝216: 136-140）。バウマンは，そのような社会学を「自由な科学技術」と呼び，流動的近代において「法令と運命による個人」を「選択と事実上の個人の地位」に引き上げる方法と手段についての知識であると言う。自由な科学技術の担い手である社会学者は，人々との対話を通じて社会問題をともに理解し，意見の数や代替案を増やし，新たな生活の選択可能性を押し広げることを試みなければならないとバウマンはいう。バウマンは，経営理性に奉仕しようとしたアカデミックな社会学を批判し，ブラウォイの要請に応え，「自由の科学技術」としての社会学を前例のないほど多くの公衆に解放し，その需要に応えるべきであると論じている。

⒁ 東京大学のリベラルアーツ教育のプログラムを主導した藤垣裕子と柳川範之が唱える「ダイナミックな能力としての教養」は，社会関係資本としての教養を考える際に参考になる（藤垣・柳川 2019）。藤垣と柳川の考える教養は，文化資本のような知識の集積としての教養ではなく，専門教育で育まれた思考の軸を保ちながら，自らの専門性を相対化し，物事や他者を理解しようとする総合的能力である。文系理系を問わず，学問に従事する者が自らの研究成果が社会の中にどう埋め込まれ展開されていくのかを想像できる，社会的リテラシーにかかわる能力でもある。また企業において社外の人や企業と積極的に交流することによってイノベーションを起こそうとする「オープンイノベーション」にも「ダイナミックな能力としての教養」は親和的である。ヌスバウムも，発達した想像力が健全なビジネス文化の鍵であり「イノベーション」は，柔軟で創造的で度量のある知性を必要とすると述べている。文学や芸術はこうした能力を育み，ビジネス文化に活力を与えるとヌ

スバウムは主張している（Nussbaum 2010＝2013: 145）。

藤垣と柳川は，この「ダイナミックな能力としての教養」が，学問の世界と現実の課題の間，専門的知性と市民的知性との間を往還するものであるという。この「ダイナミックな能力としての教養」は，自らの職業や専門知を相対化し，職業や専門知を超えた「公的なもの」を把握し，他者とともに「活動（action）」する市民の能力としての「徳」と合致する。この「ダイナミックな能力としての教養」が「公的なもの」と結びついた場合，ただちに公共社会学が必要とする社会関係資本を形成する市民的能力となると考えられる。

小田実は，自分の職能で問題が解決しない時に，人々が集いその問題を共有することで，「職能人」ではなく「市民」になるという（小田 2001: 115）。職能を超えた問題を解決しようとする集いが「市民運動」となり，この市民運動が根底にあって「市民社会」が形成されると小田は主張する。ブラウォイも指摘していたように，このような公的な社会運動との結びつきが公共社会学の成否の鍵を握っていると考えられる。

⑮ 河合は，古代ローマ人の「ソキエタス（societas）」が，共通世界としての公的領域として創設された政治的同盟を意味すると指摘している（河合 2020）。ソキエタスの成立は，契約を成す約束という「活動」による。さらに同盟にあたって結び付けられるソキエタス型の社会として，河合は，アレントが『革命について』で扱ったアメリカの諸州・地区・郡タウンシップや評議会などを挙げている。

⑯ アーレントとネグリ＆ハートによる共和制の評価の違いについても触れておきたい。古代ギリシアのポリスや古代ローマの共和制で実現した自由な政治空間を，アーレントは，アメリカの初期の共和制に見ている（Arendt 1963＝1995）。アーレントが『革命とは何か』で論じた共和制において「公的なもの」の復権が進んでいるといえよう。近代社会において「公的なもの（common）」にかかわる積極的な「自由（freedom）」によって，アメリカの民主主義は，複数性を可能にする政治を実践したとアーレントは考えた。他方のネグリとハートは『コモンウェルス』の中で，「私有財産の共和制」を批判し，「共（common）」的な「富（wealth）」からなる世界を制度化し，集団的生産と統治能力を重視し，共同管理する必要性を論じている（Hardt and Negri 2009＝2012）。本稿のいう「新たな共和制（res＝物　publica＝共有の）」は，ネグリとハートが批判する「私有財産の共和制」ではなく，アレントの複数性を可能にすると同時に生命と事物のネットワークとしての生態学的自然を「共（common）」として共同管理するものとして想定している。

⑰ アーレントが述べた画一的な賃金労働は，現在の創意工夫を必要とするポストフォーディズム的生産様式の段階では，単に生命と身体の必要性に対応しているわけではない。パオロ・ヴィルノが指摘するように，ポストフォーディズム的生産様式の段階における商品の生産の中心にハーバマス的な発話行為が居座っている（Virno 2001: 7）。また本稿で指摘したステーホルダー資本主義，ESG 投資，ESG 経営，エシカル消費といた経済行為を倫理的発話行為であると評価することができる。現代では，経営行為・投資行為・消費行為も倫理的発話行為へと移行しつつある。それらの倫理的発話行為は，たんに生命や身体の必要性から生じるのではなく，アーレントが「活動」の証として考えたアレテーをめぐる闘技民主主義やユニークネスの次元へと至る深度を持っていると考えられる。

ただし，インターネットによるコミュニケーションが全面化した現在では，ジョディ・ディーンが指摘するように，SNS や検索エンジンなどのオンライン上のコミュニケーションに付随する交換価値の搾取を目的とする「コミュニケーション資本主義」が成立している（Dean 2009）。オンライン上の日常的なコミュニケーションさえも資本の価値実現の場となっているのだ。さらにこの「コミュニケーション資本主義」は，同時にショシャナ・ズボフが提起している「監視資本主義」と連動している。ズボフは，無数のデジタル機器などのガジェットで繋がったネットワーク状コミュニケーションを媒介にして，人々が監視の対象となる監視資本主義が成立しているという（Zuboff 2019＝2021）。ズボフは，監視資本主義を「ビッグ・アザー（巨大な他者）」として人々の行動を道具主義的に支配するというディストピアを描き出している。コミュニケーション資本主義や監視資本主義というオンライン上のネットワークメディアによる搾取と支配の問題は，国家権力による市民に対する監視と統制，動物化による人間性の喪失などとも結びついおり，もう一つの「公共性の

危機」というべき事態を引き起こしている。

⑱ ダナ・ハラウェイは，「人間（human）」を男の「同一（homo）」を暗黙の前提とした概念として批判的に考察している（Haraway 2016）。ハラウェイは，「人間（human）」の中に組み込まれた男性中心主義を批判し，「人間（human）」の代替案として「腐食（hums）」を提案する。human の語源は，インドヨーロッパ語の「大地（dhghem）」を語源としている。この語から「腐食（hums）」も派生する。ハラウェイは，全てが土の中で食べ食べられる関係にあり，それに巻き込まれることを「腐食（hums）」という語に託している。女性からのフェミニズムという要求によって人間がいわば喰われるように，さまざまな「他なるもの」によって「腐食（hums）」としての人間は問い直され，書き換えられることになる。

⑲ この有用性と真理との対抗関係は，古代ギリシアのプラトンとソフィストとの間で生じていた。ヨゼフ・ピーパーによれば，実在を世俗の実践・実益のための手段や素材として捉える世界では「哲学的テオーリア（観照）」は成立しない。実益追求の意思は，世俗の必要性から発するとピーパーは指摘する。古代ギリシアにおいて，プラトンは自らの学園であるアカデメイアを世俗的諸力から守り抜くために，神々に奉納した。プラトンは，アカデメイアを神々を称える礼拝者の教団とすることで実践・実益追求の領域から引き離し，「哲学的テオーリア（観照）」を守ったのである（ピーパー［1952］2021＝25-26）。

⑳ インゴルドは，最も人類学的であった人物としてパウル・クレーをあげ，「アートは見えるものを作り出すのではなく，見えるようにするのだ」という言葉を引用し，実験的で思弁を許されたアートが，物や他者に問いかけ気づきを与える生の技法として重要であることを指摘している（Ingold 2018＝2020: 146-147）。

㉑ 社会学に不可欠な能力として，しばしばC・W・ミルズ「社会学的想像力」が言及されてきた。ミルズが提唱した社会学的想像力の要諦は，個人の生活史を社会構造と歴史的因果関係との交点において捉えることにあった（Mills 1959＝2017）。ミルズは，この社会学的想像力をジャーナリストや研究者，科学者や編集者，芸術家や公衆が切望する能力であると考えた。あえていうならば社会学的想像力は，およそ現代の教養ある市民であれば，必要となる能力である。現代文明が持続可能性の危機に陥っている人新世という時代における社会学的想像力は，新たな条件として生態学的視点や人類学的視点を繰り込む必要があるだろう。

参考文献

Adorno, Theodor W, 1968, *Einleitung In Die Soziologie,* Suhrkamp.（河原理・太寿堂真・高安啓介・細見和之訳，2001，『社会学講義』作品社.）

Arendt, Hannah,［1958］1998, *The Human Condition,* University of Chicago Press.（志水速雄訳，1994，『人間の条件』筑摩書房.）

――, 1960, *Vita activa oder Vom tätigen Leben,* Kohlhammer.（森一郎訳，2015『活動的生』みすず書房.）

アリストテレス，2009，田中美知太郎ほか訳，『政治学』中央公論社.

Bauman, Zygmunt, 2014, *What Use Is Sociology?: Conversations with Michael Hviid Jacobsen and Keith Tester,* Polity.（伊藤茂訳，2016，『社会学の使い方』青土社.）

Bellah, Robert, 1985, *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life,* University of California Press.（島薗進・中村圭志，1991，『心の習慣－アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房.）

Bourdieu, Pierre, 1979, *La distinction: Critique sociale du jugement,* Minuit,.（石井洋二郎訳，1990，『ディスタンクシオン――社会的判断力批判　Ⅰ・Ⅱ』藤原書店.）

Braidotti, Rosi, 2013, *The Posthuman. Cambridge,* Polity Press.（門林岳史監訳，2019，『ポストヒューマン――新しい人文学に向けて』フィルムアート社）

Brown, Wendy, 2015, *Undoing the Demos: Neoliberalism's Stealth Revolution,* Zone Books.（中井亜佐子訳，2017『いかにして民主主義は失われていくのか――新自由主義の見えざる攻撃』みすず書房.）

Burawoy, Michael, 2005,"For Public Sociology", *American Sociological Review,* 70（1）：4-28.

Calhoun, Craig, 2005, The promise of public sociology, *The British Journal of Sociology.* 2005 Sep; 56（3）：355-63.

――1992,「序論：ハーバマスと公共圏」，クレイグ・キャルホーン編，山本啓・新田滋訳，『ハーバマスと公共圏』未來社，7-37.

Chakrabarty, Dipesh, 2015, *The Human Condition in the Anthropocene, Originally deliverd as a Tanner Lectures in Human Values Delivered at Yale University*.

（早川健治訳，2023，『人新世の人間の条件』晶文社.）

Dean, Jodi, 2009, *Democracy and Other Neoliberal Fantasies: Communicative Capitalism and Left Politics,* Duke University Press.

Derrida, Jacques, 2001, *L'Université sans condition,* Galilée.（西山雄二訳，2008『条件なき大学』月曜社.）

Dewey, John, 1916, *Democracy and Education: an Introduction to the Philosophy of Education,* Macmillan Publishing.（松野安男訳，1975，『民主主義と教育（下）』岩波書店.）

エシカル協会編，2022，『エシカル白書〈2022-2023〉』山川出版社.

Durkheim, Émile, 1895, *Les Règles de la méthode sociologique,* Félix Alcan.（菊谷和宏訳，2018『社会学的方法の規準』講談社.）

Fraser, Nancy, 2022, *Cannibal Capitalism,* Verso.（江口泰子訳，2023，『資本主義は私たちをなぜ幸せにしないのか』筑摩書房.）

Fressoz, Jean Baptiste. and Christophe Bonneuil, 2016, *L'Evénement Anthropocène,* Seuil.（野坂しおり訳，2018，『人新世とは何か――〈地球と人類の時代〉の思想史』青土社.）

Förster, Eckart, 2011, *Die 25 Jahre der Philosophie,* Vittorio Klostermann.（三重野清顕・佐々木雄大・池松辰男・岡崎秀二郎・岩田健佑訳，2021，『哲学の25年：体系的な再構成』法政大学出版.）

Giddens, Anthony, 1982, *Sociology: A Brief but Critical Introduction,* Macmillan,（松尾精文・成富正信ほか訳，1992，『社会学』而立書房.）

Guattari, Félix, 1989, *Les trois écologies,* Galilée.（杉村昌昭訳，2008，『三つのエコロジー』平凡社.）

Habermas, Jürgen, 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft,* Neuaufl, Suhrkamp.（細谷貞雄・山田正行訳，1994，『公共性の構造転換――市民社会の一カテゴリーについての探究（第二版）』未來社.）

――，1992，*Faktizität und Geltung: Beiträge zur Diskurstheorie des Rechts und des demokratischen Rechtsstaats,* Suhrkamp. 河上倫逸・耳野健二訳，2003『事実性と妥当性――法と民主的法治国家の討議理論にかんする研究（下）』未來社.

――1999，*Wahrheit und Rechtfertigung. Philosophische Aufsätze,* Suhrkamp.（三島憲一・大竹弘二・木前利秋・鈴木直訳，2016，『真理と正当化：哲学論文集』法政大学出版局.）

――，2019，三島憲一編訳，『デモクラシーか資本主義か――危機のなかのヨーロッパ』岩波書店.

――，2022，*Ein neuer Strukturwandel der Öeffentlichkeit und die deliberative Politik,* Suhrkamp.

Hans-Werner, Prahl, 1978, *Sozialgeschichte des Hochschulwesens,* Kösel.（山本尤訳，1988，『大学制度の社会史』法政大学出版局.）

Haraway, Donna, 2016, *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene,* Duke University Press.

Hardt, Michael and Antonio Negri, 2009, *Commonwealth,* Harvard University Press.（水嶋一憲監訳，2012，『コモンウェルス〈上〉・〈下〉－"帝国"を超える革命論』NHK 出版.）

Harvey, David, 2005, *A Brief History of Neoliberalism,* Oxford University Press.（渡辺治ほか訳，2007『新自由主義－その歴史的展開と現在』作品社.）

Havelock, Eric, 1963, *Preface to Plato,* Belknap Press.（村岡晋一訳，1997，『プラトン序説』新書館.）

畑山要介，2021，「快楽としてのエシカル消費」，橋本努編著，『ロスト欲望――社会消費社会の倫理と文化はどこへ向かうのか』勁草書房，49-67.

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, 1995, *Grundlinien der Philosophie des Rechts,* Meiner（藤野渉ほか訳，1967，「法の哲学」『世界の名著35　ヘーゲル』中央公論社，149-604.）

――，2002，舩山晋一訳，『精神哲学』岩波書店.

Horkheimer, Max, 1947, *Eclipse of Reason,* Oxford University Press.（山口祐弘訳，1987，『理性の腐蝕』せりか書房.）

Horkheimer, Max und Theodor W. Adorno, 1947, *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente,* Fischer.（徳永恂訳，1990，『啓蒙の弁証法――哲学的断相』岩波書店.）

Ingold, Tim, 2018, *Anthropology: Why It Matters,* Polity Press.（奥野克巳・宮崎幸子訳，2020，『人類学とは何か』亜紀書房.）

藤垣裕子・柳川範之，2019，『東大教授が考えるあたらしい教養』幻冬舎.

藤本温，2021，「リベラル・アーツとメカニカル・アーツ」『技術倫理研究』18号，27-44.

花田達朗，1996，『公共圏という名の社会空間』木鐸社.

Kant, Immanuel,［1784］2019, *Was ist Aufklärung? Ausgewählte kleine Schriften,* Felix Meiner Verlag.（篠田

英雄訳，1983，『啓蒙とは何か － 他4編』岩波文庫.）
――，1798, Der Streit der Fakultäten,（角忍・竹山重光ほか訳，2002，「諸学部の争い」『カント全集〈18〉諸学部の争い・遺稿集』岩波書店.）
河合恭平，2020，「11　社会的なもの／社会――その公共性と関係をめぐって」日本アーレント研究会編，『アーレント読本』法政大学出版局，261-270.
絹川正吉，2006，『大学教育の思想――学士課程教育のデザイン』東信堂.
Latour, Bruno, 1991, *Nous n'avons jamais été modernes: Essai d'anthropologie symétrique,* La Découverte.（川村久美子訳，2008，『虚構の「近代」――科学人類学は警告する』新評論.）
――，2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory,* Oxford University Press.（伊藤嘉高訳，2019，『社会的なものを組み直す――アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.）
Mill, John Stuart, 1867, *Inaugural Address Delivered to the University of St. Andrews.*（竹内一誠訳，2011，『大学教育について』岩波書店.）
Mills, Charles. Wright, 1959, *The Sociological Imagination,* Oxford University Press.（伊奈正人・中村好孝訳，2017，『社会学的想像力』筑摩書店.）
水口剛，2017，『ESG投資――新しい資本主義のかたち』日経BPM.
文部科学省，2018a，「中学校学習指導要領解説」文部科学省.
文部科学省，2018b，「高等学校学習指導要領解説」文部科学省.
Morin, Edgar, and Anne Brigitte Kern, 1999, *Homeland Earth: A Manifesto for the New Millennium,* Hampton Press.（菊地昌実訳，『祖国地球――人類はどこへ向かうのか』法政大学出版局）
Mouffe, Chantal, 2019, *For a Left Populism,* Verso Books（山本圭・塩田潤訳，2019，『左派ポピュリズムのために』明石書店.）
Müller, Jan-Werner, 2007, *Constitutional Patriotism,* Princeton, University Press.（斎藤一久ほか訳，2017，『憲法パトリオティズム』法政大学出版局.）
――, 2016, *What is Populism?,* University of Pennsylvania Press.（板橋拓己訳，2017『ポピュリズムとは何か』岩波書店.）
村澤真保呂，2021，『都市を終わらせる――「人新世」時代の精神，社会，自然』ナカニシヤ出版.
――，2022「一九世紀フランス社会学が照らす現代のエコロジー問題――心身並行論を手がかりに」『社会学雑誌』（39），39-58.
室田保夫・倉持史朗・蜂谷俊隆編著，2018，『新・基礎からの社会福祉　社会福祉』ミネルヴァ書房.
Musso, Pierre, 1999, *Saint-Simon et le saint-simonisme,* Presses Universitaires de France（杉本隆司訳，2019，『サン＝シモンとサン＝シモン主義』白水社.）
仲正昌樹，2014，『ハンナ・アーレント「人間の条件」入門講義』作品社.
仲山ひふみ，2019，「加速主義」『現代思想五月臨時増刊号　現代思想43のキーワード』第47巻第6号，38-43.
日本学術会議，2010，「日本の展望――学術からの提言　2010」日本学術会議.
Nussbaum, Martha, 2010, *Not for Profit: Why Democracy Needs the Humanities,* Princeton University Press.（小沢自然・小野正嗣訳，2013，『経済成長がすべてか？――デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店.）
大口邦雄，2014，『リベラル・アーツとは何か――その歴史的系譜』さんこう社.
小田実，2001，『小田実の世直し大学』筑摩書房.
隠岐さや香，2018，『文系と理系はなぜ分かれたのか』星海社.
ピーパー，ヨゼフ，［1952］2021，「大学とは何か」，ヨゼフ・ピーパー・土居健郎・稲垣良典・松田義幸編著，2021，『余暇と祝祭－文化の基礎』知泉書館
プラトン，1964，「ソクラテスの弁明」，久保勉訳，『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波書店，13-70.
Putnam, Robert, 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community,* Simon & Schuster.（柴内康文訳，2006，『孤独なボウリング――米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.）
柴田　彰・岡部雅仁・加藤守和，2019，『VUCA　変化の時代を生き抜く7つの条件』日経BPM.
齋藤純一，2000，『思考のフロンティア　公共性』岩波書店.
Schnädelbach, Herbert, 1984, *Philosophy in Germany 1831-1933,* Cambridge University Press.（舟山俊明・朴順南・内藤貴・渡邊福太郎訳，2009，『ドイツ哲学史1831-1933』法政大学出版局.）
盛山和夫，2012，「1　公共社会学とは何か」，盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編，『公共社会学1――リスク・市民社会・公共性』東京大学出版会，11-30.

Silvia, Federici, 2004, *Caliban and the Witch: Women, the Body and Primitive Accumulation,* Autonomedia.（小田原琳ほか訳，2017,『キャリバンと魔女――資本主義に抗する女性の身体』以文社）

Simmel, Georg,［1908］1992,“Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung,”*Simmel Gesamtausgabe,* Bd. 11, Suhrkamp. 居安正訳，1994,『社会学（上）・（下）』白水社.

Streeek, Wolfgang, 2013, *Gekaufte Zeit: Die vertagte Kreise des democratischen Kapitalisumus,* Suhrkamp. 鈴木直訳，2016『時間稼ぎの資本主義――いつまで危機を先送りできるか』みすず書房.

Swilling, Mark, 2013, Economic Crisis, Long Waves and the Sustainability Transition: An African Perspective, *Environmental Innovation and Societal Transitions,* vol.6, pp.96-115.

上野千鶴子，2012,「序　社会学の再興のために」盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編,『公共社会学 2――少子高齢社会の公共性』東京大学出版会，1-12.

宇沢弘文，2013,『経済学は人びとを幸福にできるか』東洋経済新報社.

Virno, Paolo, 2001, *Grammatica della moltitudine: Per una analisi delle forme di vita contemporanee,* Rubbettino. 廣瀬純訳，2004『マルチチュードの文法――現代的な生活形式を分析するために』月曜社.

Žižek, Slavoj, 2021, *Pandemic! 2: Chronicles of a Time Lost,* Polity.（岡崎龍監修・中林敦子訳，2021,『パンデミック 2 COVID-19 と失われた時』P ヴァイン.）

吉見俊哉，2011,『大学とは何か』岩波新書.

芳沢光雄，2018,『リベラルアーツの学び――理系的思考のすすめ』岩波書店.

Weber, Max,［1904］1982,‘Die“Objektivität”sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis,’ *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre von Max Weber.* 5 Auflage, J. C. B. Mohr. 富永祐治ほか訳，1998,『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店.

――, 1919, *Wissenschaft als Beruf*.（尾高邦雄訳，1980,『職業としての学問』岩波書店.）

ライト，トム，2009,「解放のためのリベラル・エデュケーション」上垣豊編『市場化する大学と教養教育の危機（龍谷大学社会科学研究所叢書）』洛北出版，61-97.

Zuboff, Shoshana, 2019, *The Age of Surveillance Capitalism: The Fight for a Human Future at the New Frontier of Power,* PublicAffairs.（野中香方子訳，2021『監視資本主義――人類の未来を賭けた闘い』東洋経済新報社.）

Crisis in the Public Sphere and the Challenges of Public Sociology:
Towards Dialogue between Citizens and Various Sciences

Ryusuke Seike

"The crisis of social integration," "the crisis of education and humanity," and "the global ecological crisis" are three interconnected crises that should be referred to as a "polycrisis." An important academic response to this contemporary polycrisis in the field of social sciences is a proposal for a "public sociology" that aims to foster a dialogue between citizens and these various sciences. This paper examines the crisis of public spiritedness and the nature of this polycrisis while discussing the value of a public sociology that actively engages with this crisis. This paper also contemplates the contemporary crisis in public spiritedness through consideration of the contemporary relevance of Hannah Arendt's "The Human Condition."